
魔法少女リリカルなのはPHANTASIA

風刻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは PHANTASIA

【Zコード】

Z6990V

【作者名】

風刻

【あらすじ】

新暦80年、第45無人世界 サンジェルマン の古代遺跡にて、時空管理局執務官とその執務官補佐が、とあるロストロギアの調査中に失踪した。執務官であるティアナは、失踪した二名の搭乗していた次元航行艦からの要請を受け、彼らの捜索を行うこととなるが……。謎の少女との戦闘。新暦75年への回帰。新たなる友情。そして、迫られる苦渋の決断。それらを超えた先に待っているのは、果たして……？ 魔法少女リリカルなのは PHANTASIA、始まります。

未来からタイムスリップ（？）したティアナが主人公の、歪なSt
rivers再構成モノです。一応原作通りに事件が発生しますが、
結構脇道に逸れます。初投稿ですので至らない点など多々あるとは
思いますが、温かい目で見守ってやってください。

パンタシア

「魔力反応、近いです。恐らくこの辺に古代遺物が眠っているものかと」

「……そうか。ハルミ、いつでも対処出来るよ!」、デバイスと集中力だけは手放すな」

「わかつてますよ、エーリッヒ執務官」

仄暗い古代遺跡。遙か昔に主を失い、今となつては最早何のために建てられたのかすらわからなくなってしまった、栄華の残滓。永きに渡つて眠り続けていた、古代の記憶。

まるで時が止まっているかのような遺跡の中を、時空管理局の職員達が、エーリッヒと呼ばれた初老の男と、ハルミと呼ばれた若い女性を先頭にして、神経を尖らせながらゆっくりと歩みを進めていた。

「魔力反応、さらに近いです。……あつ」

「どうした?」

「ターゲット以外に、多数の魔力反応が発生、推定ランクはB。前方よりこちらに接近しています。……恐らく、この遺跡の防衛機構かと」

「総数は?」

「……およそ、60です。かなり密集している様子からすると、相

手は小型かと思われます

「ふむ、武装局員は散開せよ。敵が陣形に侵入し次第、多段砲撃で包囲殲滅する。」

薄暗い部屋に響く足音。やがて武装局員の配置を終えると、指令役のH-リッヒも陣形に加わる。

「敵性魔力反応、更に接近しています！ 予想交戦時間まで、約14秒！」

「総員、砲撃準備！」

H-リッヒの指示で、局員達がデバイスを構える。

「.....4.....3.....2.....攻撃、来ます！」

「一陣、てえーッ！-！」

局員達の前に、黒い虫のような何かの群れが姿を現したのと、ソレを無数の光の槍が飲み込んだのは、ほぼ同時だつた。

「一陣、てえーッ！-！」

続いて飛び込んでくるソレの群れを、局員達は淡々と光の中に消しおつてゆく。殲滅作業を繰り返すことしばらく、彼らに向かってくる敵はもうビリにもいなくなっていた。

「敵性魔力反応、全てロスト！」

「よし、階」苦労！ 攻撃がこの一回とは限らん。隊列を組み直し
次第出発する！」

彼らは再び歩き出す。ヒーリッヒ達は警戒していたが、その後一
度と襲撃を受けることは無かつた。

重苦しい闇に包まれた遺跡の最奥。そこに、それはあつた。

魔導書のような形をした古代遺物 ロストロギアは、不気味な
沈黙の中で仄かな光を放ちつつ、静かに祭壇の上に浮かんでいた。

「魔力反応、最大値を計測。……間違いないですね。これが例のロ
ストロギアのようですね」

「トラップがしきものは見当たるか？」

「いえ、特には」

「ならば即時封印作業に取りかかる。武装局員は周囲の安全を確保
せよ。敵に奇襲されでは敵わんからな」

武装局員達への指示を終えると、ヒーリッヒはロストロギアに向
かって剣状のデバイスを構える。

「ゆけるか、バルムンク」

『All right.』

「私も手伝います。……ブリーシングガメン！」

『Yes master.』

エーリッヒは深呼吸をすると、魔導書を見据える。そんな彼を横目で一瞥し、ハルミは詠唱を開始した。

「輝ける祈り、我が願いを星に託し、彼の者に封印の力を捧げん……」

ハルミの封印強化魔法がエーリッヒのデバイスに宿る。刹那、エーリッヒは疾風の如く飛び上がった。

「我が剣閃を受けてみよ！ シーリングソード！」

『Sealing sword.』

一陣の風が翔ける。一瞬の交錯。音もなく着地するエーリッヒ。

「やつたか？」

「まだわかりません」

封印の剣を受けて尚、魔導書は空中で静寂を保っている。誰もが固唾を飲んで見守る中、その時は訪れた。

『魔力反応を感知。《パンタシア》起動』

突如、魔導書を中心に大型魔方陣が展開。同時に、これまで沈黙を守っていた魔導書が機械音声と共に起動した。

「な……！ いかん、封印失敗か！？」

「……！？ そんな……！」

局員達の間に広まるざわめき。動搖する彼らを尻目に、魔導書は淡々と言葉を紡いでゆく。

『高次元異世界間転送を行います。安全の為、使用者以外は転送室から退避してください』

「まさか、封印の魔力に反応したのか……！ いつなつては何が起じるかわからん！ 総員退避！」

「早く！ みんな逃げて！」

弾かれたように出口に殺到する局員達。いつしている間にも、部屋には魔導書の魔力が満ちてゆく。

「ハルミ、お前も早く逃げる！ わしは今一度封印を試みる！』

「そんな、父さん！？」

「早くしろ！ 卷き込まれたいのか！」

「イヤ！ 父さんを残して行けるわけないじゃない！…』

一步も引こうとしないハルミ。エーリッヒが再度口を開きかけた。その時、再び魔導書の機械音声が響いた。

『使用者の深層意識より指定世界を特定。転送開始まで、残り10秒』

「くっ、もう時間が……かくなる上は仕方がない！　ハルミー……かハハ、封印強化を！」

「わかった！　ブリーシングガメン、お願ひ！」

『転送開始まで、残り5秒』

ハルミの封印強化を受け、エーリッヒは魔導書に最後の突撃を仕掛けた。

『転送開始まで、残り2秒』

「つおおおおおおッ！…」

バルムンクの剣先が、魔導書に迫る。永劫たる一瞬の静寂。そして

パンタシア（後書き）

感想などお待ちしております。

第45無人世界 サンジェルマン。管理局の観測所があることを除けば、無人世界の名に相応しく、見渡す限りの荒涼とした大地に申し訳程度のひ弱な草木が点在しているばかり。空は年中塵と埃に覆われ、資源も乏しく、本来なら管理局からも無視されてしまうような世界なのだが、最近の調査で年代不明の遺構が複数見つかっており、その手の人間が調査、もしくは盗掘目的で渡航することが多い。年代不明といふどことなく怪しげな肩書きのためか、一部ではこの世界こそがあの伝説のアルハザードなのでは、などという風説が流布しているが、公の場では一笑に付されているのが現状だつたりする。ともかく、今年で21になる若き敏腕執務官、ティアナ『ランスター』が降り立つたのは、そういう場所だった。

「……まさに荒れ地ね」

ぐるうりと辺りを見渡して、一言。恐ろしく端的だが、事実これ以上に的確な表現が見当たらないのだから仕方がない。風にのって砂塵が舞い、ティアナは顔をしかめた。

ティアナが巡航艦ビスマルクから協力要請を受けたのは、彼女が別件で近くの管理世界に訪ねていった、その帰途のことだった。

内容は、第45無人世界での、恐らくロストロギアのものと思われる魔力反応の調査と、その先行調査中に失踪した執務官及びに執務官補の捜索。調査対象が情報未確認のロストロギアの上、既に二人の魔導師が失踪している。故に危険も未知数であるが、ティアナは彼女の関わった重大事件にロストロギア関連のケースが多く、今回の一要請はその腕を買われたためであった。

『ランスター執務官、聞こえますか?』

ティアナに通信が入る。ビスマルクの通信手からだつた。

「ええ、大丈夫です」

『はい、それでは事前の打ち合わせ通りに、管理局所有の観測所へ向かって、そこで詳しい説明を受けてください。ただいま観測所駐在の史跡警備隊員がそちらに派遣されていますので、案内はその方に』

「了解。……はあ……」

『通信終了。モニターが消えると同時に、ティアナは溜め息をついた。

時空管理局執務官という職業柄、予定外の任務が入るのは仕方がないし、ここ数年の勤務でもう慣れもしていた。……ただ、今回はタイミングが最悪だつた。

（よりによつて、久しぶりにみんなと休暇が重なつたつて時に……）

元機動六課の面々は、それぞれが各自の道を歩んでいたため、当然休みが合うことは珍しい。加えて管理局の仕事はいつも何かしら忙しく、たとえ休みが合つたとしても出来ることは限られている。その珍しい休みを明日明後日と確保し、元六課の面々と久しぶりの顔合わせをしようと計画をしていたのだが、今回の調査協力でお預けになつてしまつた。

（……名残惜しく思うあたり、あたしもまだまだ、か）

ベテラン執務官たるもの、この程度で気落ちしてはいけない。ティアナは自嘲気味に苦笑した。

「おーい！」

ふと、誰か人の声がした。ティアナが声のした方をよく見てみると、砂塵で霞む景色の中の人影を見つけた。どうやら、観測所職員が到着したようだ。

「おーい！」

「いじりぢでーす！」

ティアナは手を降つて居場所を知らせる。相手はすぐに気が付いてくれたみたいで、彼女の方に駆け寄ってきた。

「ティアナ＝ランスター執務官ですね？ 私、サンジョルマン史跡警備隊所属、エミール＝バイエルン一等陸士です。お待ちしておりました。お迎えが遅れて申し訳ございません」

そう言つてティアナに敬礼する青年、エミール。見た目からして、ティアナよりも三・四歳年下のようだ。

「いえ、あたしも今到着したばかりですから。迅速な対応、感謝します」

「お気遣いありがとうございます。それでは、ランスター執務官を観測所へとお連れします」

エミールは再び敬礼をすると、ティアナに背を向け元来た方へと

歩き出した。ティアナはもう一度だけ溜め息をつき、彼の後を追つた。

観測所はすぐに見えてきた。地上六階建ての立派な建物で、周囲とのミスマッチ具合がなんとも言えない雰囲気を醸し出している。

「どうぞ、中へ。所長がお待ちかねです」

建物の中は流石といふか、ミッドのそれと大差ない生活環境が整っていた。職員達が自らの業務に励む中、ティアナは最上階の所長室へと通される。整頓の行き届いた小綺麗な一室の所長席には、金髪の少女が一人ちょこんと座っていた。

「失礼します。ソニア所長、ティアナ＝ランスター執務官殿をお連れいたしました」

「うむ。ヒール君、案内、苦労。通常業務に戻つてくれたまえ」

「はい、了解しました」

ヒールは少女ソニア所長と、ティアナに敬礼をして所長室を去つていった。

「さて……ランスター執務官、まずはこの度のロストロギアの調査

及び不明人員の捜索における協力を、全職員を代表して感謝する。

私はサンジエルマン史跡警備隊隊長、並びにサンジエルマン次元観測所所長、ソニア＝リューケル＝等陸佐だ」

「ティアナ＝ランスター 執務官です。短い間ですが、お世話になります」

「見た目が幼いとはいっても、一応相手は上官である。今度はティアナが敬礼をする番だった。

「うむ。本来なら客人には茶の一杯でもご馳走するのが礼儀なのが、生憎そんな状況でもないようなのでな……早速だが、失踪している二名の話は聞いているか？」

「ええ、一応。確かに、一人はエーリッヒ＝ラインラント執務官、56歳。魔導師ランクは空戦AA。もう一人はハルミ＝ラインラント執務官補、18歳。魔導師ランクは陸戦B。二人とも巡航艦ビスマルクの乗員で、無人世界 サンジエルマン に存在する古代遺跡ウイーナ 内でのロストロギア調査中に失踪……ですよね？」

「ああ。詳しいことは会議でも説明するが、一人が失踪した時に行動を共にしていた調査隊メンバーの証言に拠れば、彼らが問題のロストロギアを発見し、封印行動を開始した直後、ロストロギアが起動。ラインラント執務官の命令で全員が退避したのだが、気が付いたら一人とも消えていたということだ」

「つまり、失踪はロストロギアによって引き起こされた、と

「証言を信用するならば、ほぼ間違いないと言つてもよいだろう。尤も、現時点ではロストロギアの防衛機能によるものなのか、純粹

にその効果によるものかはわからないがな」

「ちなみに田撃者が存在するということは、問題のロストロギアの形状くらいは分かっているんですね？ 無限書庫の方に調査依頼は出されたのですか？」

「大丈夫だ、その点は抜かりない。……ただ、やはり形状だけでは有用な情報になり得ないのも現状でな」

溜め息をつくソニア所長。その顔に有り有りと浮かぶ疲労の色は、彼女がこの問題に対してもう少し手を打とうと尽力している様子が見てとれる。ティアナは一瞬、在りし日の上司の姿を彼女の中に見た気がした。

「ともかく、今は一刻も早い失踪者の発見が求められる。……ランスター執務官、今一度ご助力を願う。どうか、我々に力を貸してほしい」

「はい、勿論です。このティアナ＝ランスター、微力ながら全力で協力させてもらいます！」

「ああ……ありがとうございます！」

敬礼するティアナに向かって、ソニア所長は小さく微笑んだ。

対ロストロギア特別会議の結果、本局から専門の部隊が到着するまでの間、臨時に捜索隊を組織、失踪者の捜索を行うことが決定さ

れた。尚、ロストロギアを発見した場合、可能なならば封印活動を行うことが望ましいが、あくまでも最優先事項は失踪者の捜索である、ということで、危険な場合は即刻退避することが義務付けられた。

失踪の現場となつた遺跡への突入部隊には、ティアナを初めとした経験豊富な者が選ばれ、残りの者は観測所にて総指揮を執るソニア所長の補佐をすることとなつた。

「それでは、C班の任務についてもう一度説明します」

件の遺跡を前にして、ティアナは自らが指揮する部隊を見回した。

「まず、A班とB班が先発で突入、遺跡の防衛機構を抑えます。我々C班は彼ら先発隊が安全を確保した上で不明者の捜索をすることになります。ただ、不測の事態に備えて、全員デバイスはいつでも使えるようにしておいてください。後は……」

『失礼します。ランスター執務官、A B両班が出撃を開始しました』

「わかりました。安全が確認され次第、こちらも出ます

『了解しました。……御武運を』

通信によるエミールの報告を受け、小さく頷くティアナ。いよいよ出撃の時。これからは気を引き締めなければならない。

一つ、大きく深呼吸。その時を今か今かと待ち続け、そして、

『A B両班により遺跡内は制圧、安全を確保しました！ C班、突入をお願いします！』

「C班、総員突入！ 一人一組に分かれて全力で不明者の捜索に当たるよう！」

ティアナの指示で、遺跡内に散らばつていく捜索隊員達。ティアナ自身も、単身遺跡最奥へ向かった。

（思つたより広いわね……）

愛銃のクロスミラージュを構え、僅かな灯りを頼りに迷路のよくな遺跡内を進んでゆく。時々すれ違う先発隊の面々に情報を訊きつつ、あくまでも慎重に、無理をせず。

『Caution.』

遺跡に突入してからどれほどの時間が経つただろ？ 突然、クロスミラージュの警告音が鳴り響いた。

「どうしたの、クロスミラージュ？」

『I sense a large magic signal. Please be careful.（大型の魔力反応を感知しました。気を付けてください）』

「大型の魔力反応って……まさか、ロストロギア！？」

これは自分一人の判断で行動していい問題ではない。そう思ったティアナは、マニコアル通り司令部への通信を試みる。

「こちらティアナ＝ランスター執務官。HQ、応答してください。
… HQ、応答してください、HQ！… ウソ、繋がらない…
？」

『Probably, the thick magical retard our communication. (恐ろしく、高濃度の魔力が我々の通信を阻害しているのかと)』

「くつ、面倒になつたわね。一度戻つて対策を…」

撤退を決断しかけたティアナ。だが次の瞬間、そんな彼女の目にあり得ないものが飛び込んできた。

「……え」

ティアナのいる場所から更に奥、遺跡の最深部へと通じる暗い道に、見事な銀髪の少女が吸い込まれるようにして消えていった。彼女が何者かは分からぬが、少なくとも今の光景が「異常」だとうことは紛れもない事実だった。

「クロスミラージュ、撤退は中止！ 今の子を追うわよ！」

『Roger』

ティアナは謎の少女を保護すべく、彼女の後を追う。自らの走る足音だけが不気味に反響する中で、だが先程の少女の姿は影も形も

ない。

それでも辛抱強く追跡を続けた結果、ティアナはひとりウイーナ遺跡の最奥、失踪事件の真の現場へと足を踏み入れることとなつた。

「これは……！」

これまでとはうつて変わって、薄明かるい光に満ちた部屋の中央、祭壇らしきもの上に浮かぶ魔導書。そしてそれに手を伸ばす銀髪の少女。ティアナは直感で、その魔導書が例のロストロゴニアだと理解した。

「そこ」のあなた、動かないで！』

「……」

ティアナの声に、少女の動きが止まる。クロスミラージュの銃口を向けながら、ゆっくりと少女に近づいてゆくティアナ。

「」の遺跡は第一種立ち入り禁止区域に指定されています。危険ですでの、一般の方はすぐに退避してください

ティアナは少女にそう警告する。無論、彼女が素直に従うなどとは思っていない。あくまでも、形式的なものに過ぎなかつた。

「もし抵抗するようでしたら、執務官権限に基づき、公務執行妨害によりあなたを逮捕します」

「……ふうん。私も焼きが回つたものね。すぐ後ろにある配に配に付かないなんて」

意外にも素直にホールドアップする少女。少々不審に思いながらも、ティアナはゆっくりと彼女を魔導書の側から引き離した。流れるような銀髪を肩まで伸ばした15・6歳くらいの少女は、特に抵抗するでもなく、だからといって協力的というわけでもなかった。

「あなたの目的は？　どうしてここに遺跡に？」

「さあね？　貴女に答える義理はないわ」

銃口を突きつけられるも、不遜な態度をとり続ける少女。

「……とつあえず、あなたを観測所まで連行します。ぐれぐれも抵抗などはしないよつ」

「嫌よ。私にはやることがあるもの」

「！」

刹那、少女の姿が搔き消える。ティアナは反射的にスタンバレットを撃ち放つたが、虚しく空を突き抜けた。

「だから悪いけど、捕まるわけにはいかないのよね」

「！　いつの間に……！」

消えた少女はティアナの後ろに立っていた。ハッとして距離を取るティアナ。初めこそ驚いたものの、ティアナは冷静に状況を分析する。

(今は高速移動……いや、空間移動系の魔法かな。……厄介ね)

「ほり、どうしたの？ 私を逮捕するんじゃないの？」

「くっ……！ クロスファイヤーシュート！」

橙色の弾丸が無数に生成され、少女に向かつて放たれる。だが、少女は先程のように消えてしまい、行き場を失つた弾丸は空中で破裂する。

「ほりほり、ビームを狙つているのかしら？」

またしてもティアナの後ろに現れ、クスクスと嘲笑する少女。

「……もちろん、あなたを狙つてるのよー。」

「ツー？」

だがティアナは同じ手を一度も喰らつほど、愚鈍ではない。全て炸裂したかのように見せかけた魔弾、その内の一発の隠し弾が、すっかり油断していた少女を真後ろから襲つた。

咄嗟にシールドを張り、魔弾を防ぐ少女。そんな彼女に追い打ちをかけるティアナ。新たに生成されていた12の弾丸が、少女のがら空きの背中を直撃した。

巻き起こる魔力爆発。部屋中に朦朧とした煙が立ち込める。

(少しやり過ぎたかしら……加減はしたんだけど)

「中々やるじやない……貴女のこと、正直見ぐびつてたわ」

「一。」

仕留めた、そう思つていたティアナは、煙の中に響く少女の声に目を見開いた。

「ほんのお遊びのつもりだつたけれど……いいわ、相手をしてあげる」

煙が晴れ、そこにいたのは白いロープ状のバリアジャケットに身を包んだ無傷の少女。そしてその手には、彼女の髪と同じ色の大弓が握られていた。

「今度はこっちからいくわよ。ムーンライトアロー！」

（速い！）

銀の弓から放たれた矢が、輝く軌跡を残しながら一直線にティアナに迫る。矢は単純な軌道なれどかなりの弾速で、ティアナは感覚で横に飛び、辛くもそれを避ける。

間髪入れずに再び飛来する銀色の矢。ティアナはそれを前に飛び出すようにしてかわすと、お返しとばかりに時間差で三発、ヴァリブルバレットをお見舞いする。だが、先程も見せた少女の転移魔法のせいで、有効打を打えるには至らない。

「一対一で、それもこんな屋内で弓なんて使うもんじゃないわね。扱いにくくてしちゃうがないわ」

「なら無駄な抵抗はやめて降参しなさい。そうね、今だつたらまだあなたには弁護の機会があるわよ」

「降参？」「冗談を！」

少女は再び弓を構える。そして、

「今度は本気の一撃よ。……狂乱に踊れ、ルナティックアロー！」
天に向かつて放たれた白銀の矢は空中で無数に分裂、拡散したそれは銀の暴風となつて、無秩序な軌道を描きティアナへと襲いかかる。

「つー」

途切れることなく続く、四方八方からの矢の嵐。さすがのティアナも、これには防戦を強いられるしかなかつた。

「どう？ 降参するのは貴女の方じやないかしり？」

「笑止ー。」

ティアナはプロテクションで身を護りつつ、戦況の打開策を考える。

おびただしい数の矢だったが、きっといつかは途切れる。そのときが反撃の好機になる。実際、その機会は唐突に訪れた。

（今つー。）

『Danger mode.』

嵐が去つた刹那、ティアナはクロスミラージュをダガーモードに

変化をせ、少女の懷に飛び込もうと

「……ムーンライトカノン！」

「砲撃！？ しまつ ！」

飛び出したティアナを待ち受けていた至近距離からの砲撃魔法の洗礼。しかし蒼白い光の奔流は、間一髪でティアナを捉えることはなかつた。

（なるほど、あたしが足止めされている内にチャージしたってわけね……）

ますますもつて厄介な。ティアナは額の汗を拭う。

（早く勝負を決めたいけど、まともにやつたって避けられる。それなら……）

「ボーッとしてる暇はないわよ。ルナティックアロー！」

再び飛来する銀の暴風。為す術なくプロテクションに閉じ込められるティアナ。

「さて、今度は逃がさない……？」

しかし嵐が去った時、ティアナの姿はどこにもなかつた。砲撃をチャージしたまま、周囲を見回す少女。

「……そこねー。」

「一。」

物陰に隠れて狙いを定めているティアナを見つけた少女は、今度こそ容赦なく砲撃魔法を発射。寸分違わず彼女を光の中に消し去つたかのように見えた。だが、

『Stun bullet.』

「！？」

背後からの奇襲。少女が咄嗟に防御して振り返ると、つい今さっき撃墜したはずのティアナが、そこにいた。思わず後退りする少女。

「貴女、何で……！ まさか、幻術！？」

「ええ、そうよ。わあ、観念なさい。」

「ふ、ふん、目眩まし風情が何度も通用するとは思わないことねー。」

双方一步も譲らない攻防戦。睨み合いが続く中、しかし、一人とも失念していることがあった。

『転送開始まで、残り2秒』

「「え」」

耳慣れない機械音声。そして、一人が状況を把握する間もなく、祭壇の部屋をまばゆい光が包み込んだ。

『転送を完了しました』

銀の少女（後書き）

感想などお待ちしております。

「ん……」

ティアナはゆっくりと目を開ける。視界に写ったのは、カビ臭い遺跡の天井。ではなく、近代的な綺麗な天井。それを見て初めて、ティアナは自分がベッドに寝かされていることに気付いた。

（ここは……病院？　あれ、あたし、確か遺跡で女の子と戦闘中に……）

そこから先の記憶がない。ひょっとして、彼女に負けて搬送されたのではないか。嫌な想像が頭をよぎり、ティアナはたまらず起き上がった。すると、

「あ、気がついた？」

「……！　シャマル先生！？」

病室に入ってきたのは他でもない、元六課の医務官、シャマルだつた。予期せぬ再会に、混乱するティアナ。

「えっと、どうして……」

「あり、覚えてないの？　今日の模擬戦でなのははちやんに撃墜されちやつたこと」

「え……」

シャマル先生は一体何の話をしているのだろう。模擬戦で撃墜？なのはさん？ ますます訳がわからなくなるティアナ。

「うーん、なのはちゃん、加減はしたって言つてたんだけどなあ

「……あの、失礼ですが、ドッキリか何かであたしをからかつてるとでしようが？」

「ドッキリって……なのはちゃん、ホントに加減したのかしら」

苦笑するシャマル。そんな彼女を見て、そして周囲を見回してみて、ティアナはある一つの仮説 突拍子もないことだが を思い付いた。

「あの、シャマル先生」

「うん？」

「今、新暦何年ですか……？」

恐る恐る尋ねる。願わくは、自分の仮説が間違つていますように、と真摯に願いながら。

「え？ 勿論新暦75年だけど……こきなりどつこ

「 ッ！？！？！」

「あつ、ティアナ！ いきなり走つたら

」

シャマルの怒ったような声が聞こえるが、今のティアナの耳には

届かなかつた。

医務室を出て、通路で会う人全員に暦を訊いていく。だが、返つてくる答えは皆同じ「新暦75年」。しかも、その内に自分がいる建物が旧機動六課の隊舎そのもので、自分が六課の隊服を着て髪を二つに結んでいることに気が付いたりして……じわじわと突拍子もない仮説が現実味を帯びてくるのを、ティアナはうすら寒い気持ちで感じていた。

「はは、そんな……まさか……！」

JS事件を解決し、念願の執務官になつてマリアージュ事件を解決し、あの遺跡で謎の少女と戦闘し それら全てが、ただのリアルな夢だつたとでもいうのだろうか。認めたくない現実がどつと押し寄せ、廊下に崩れ落ちるティアナ。

「ティア！」

「！」

そんなとき、絶望しかけたティアナの耳に響く、親友の声。顔を上げれば、親友とフォワードの仲間達が、自分の方に駆け寄つてくるのが見えた。どうしようもない絶望感が、数歩遠のいた。

「スバル……それに、エリオ……キャロ……」

「ティア、『ごめん！ あたしが……あたしがもうひとつとちゃんとしてたら……！』

スバルがどうして謝つているのか、ティアナには大体想像がついた。恐らく、あの日の模擬戦 自分が無茶な作戦をして、なのは

さんに撃墜されてしまった　のことだらけ。

「えっと、ティア……？」

ただ、ティアナからしてみればそんなことは遠い過去の話。とつ
くに済んだことな訳で。

（参ったなあ……）

20歳だった自分からすれば幼く見える、目の前の15歳のスバルの申し訳なさそうな表情に、一体どんな反応をしていいのやら。ティアナは対応に困ってしまった。

「はいはい、その辺にしておきなわー」

「……」

不意に、この場で聞こえるはずのない声が、聞こえた。同時に、薄れかかっていた記憶の数々が、鮮明な色彩を持つて甦る。

「あ、ルナ……」

「ティアナは今とってもナイーブな心境なんだろから、そつとし
といて……」

「動かないで」

刹那、ティアナはクロスミリージュを声の主に突きつける。この一瞬の出来事に、ティアナを除いた全員が、彼女の突然の行動に呆気にとられてしまう。

「……何の真似かしら？」

声の主、遺跡で戦つた銀色の髪の少女が、その時と全く変わらない姿のまま、困惑したように言った。

「答えて。どうしてあなたがここにいるの？」

寸分違わず狙いをつけながら、小さく低い声で少女に問う。その時、少女の目が一瞬悲しそうに伏せられたのを、ティアナは見逃さなかつた。

「わ、わ、わ、ちょ、ティア！ こんなところ誰かに見られたら不味いって！ 何があつたか知らないけど、とりあえず落ち着いて！ ルナも、ティアを怒らせるようなことしたの！？ ええと、ほら！ とにかく一人とも謝つて！ あれ、でも謝らなきやいけないのはあたしの方で、でもティアもルナに酷いことしてるし、でもルナも……」

「あの、まずスバルさんが落ち着いた方が

「ティアさん、早くデバイスをしまつてください！ もし隊長達に見られたら………」

「…………」

仲間達に諭され、渋々銃を引つ込めるティアナ。しかし、先程までティアナと戦つていたはずの少女に、警戒の眼差しを向けることは止めない。

『ティ……貴女、後で話があるの。裏まで来れる?』

『……ええ。あたしも訊きたいことが山ほどあるわ』

一言二言、念話で話を付け、何とかその場は収まった。ティアナの記憶にある「あの時」とは違った重苦しい空気が流れていた。

六課隊舎の裏の林。そこでティアナと少女は一人きりで対峙していた。

「…………最初に一つ確認させてもらうわ。貴女は新暦80年のある日、サンジエルマン無人世界の古代遺跡内で、私と戦闘した時空管理局執務官、ティアナ＝ランスター…………間違いないわね？」

「……………アーヴィング」

「貴女は私との戦闘中に意識を失い、気が付いたら『ここ』にいた……そうでしょうか？」

「そう、だけど……ここの何なの？ ルダなの？ あなたは一体誰なの？」本当に新暦75年のミシドチ どうしてここの……」「

「ああ、もう一回

次から次へと出でてくる質問に、少女は煩そうに首を振った。

「そんなに一遍に訊かれても答えられないわよー。」

「…………」

「全く……まず、『』は新暦75年のミッドチルダ。これは間違いないわ。……ただし、貴女の知る『ミッドチルダ』ではないけれど」

「…………？」

「あの部屋にあつたロストロギア『パンタシア』。あれの効果はね、使用者を自身が望む平行世界へと転移させるものなの。あの頃へ戻りたい。失われた過去を取り戻したい。大事な人を救いたい……そんな人々の想いの結晶が『パンタシア』なのよ。……ここまで言えば、私達が『』になつてゐるのか、頭のいい貴女ならわかるでしょ？」

「平行世界……起つたかもしない、可能性の世界に迷いこんでる……？」

「『』と。……信じる信じないは貴女の勝手だけど」

ポツリと呟いたティアナの答えに、満足げに頷く少女。

「次は私についてだけど、まず、私の名前はルナ＝モーロック。『あの『世界では……ま、しがない遺跡盗掘者とでも思つてもうつて構わないわ。そして『』の世界では……』」

少女 ルナは一旦言葉を切り、そして、続ける。

「古代遺物管理部機動六課のフォワードで、スバル＝ナカジマとティアナ＝ランスターの親友ってところかしら。私の意識が飛ばされたのは今から2年前で……貴女達と知り合ったのも、丁度その頃」

「つー」

ちくり、とティアナの心が痛んだ。さつきから引っ掛けっていた、隊舎で見せた自分を気遣うような表情。銃を突き付けた時の、傷付いたような表情。あれはきっと、ルナの本心だったのだろう。……それを知った今、ティアナは軽い罪悪感に苛まれた。

「……なんか、色々とじめん」

「気にしないで。私もそのデバイスを見たとき、同じようなことをしたから」

ルナは自嘲気味に笑つて言った。

「それから、今後のことなんだけど……」

ルナが再び口を開こうとした、その時。

『ALERT』

「「ーーー」」

鳴り響く警戒警報。ティアナとルナは、互いに顔を見合わせる。

「……ルナ、だっけ？ 隊長達の所まで急ぐわよ

「ティ……えつと」

ティアナの名前を呼びかけて、口をつぐむルナ。そんな彼女の様子を見て、ティアナは優しく微笑んだ。

「ティアナでいい。『あの』世界では敵同士だつたけど、『この』世界では親友なんでしょう？ だつたら、変に遠慮なんかしてたら不自然じやない。……違つ？」

「…………」

「あなたが出てくれたとき、正直あたし、ホッとしたの。自分のしてきたこと、苦しかったこと、楽しかったこと……やつぱり夢や幻なんかじやなかつたんだつてわかつたから。それに……これからはさ、あなたがあたしにとつて唯一の『証人』なんだから、よそよそしくなんてしてられないでしょ？」

「……そつね。それじゃあ……ティアナ、行きましょ」

「ええ」

一人は頷き合つと、隊舎に向かつて駆け出した。一言「ありがと」う」といつ言葉を残して。

「ティアナは、出動待機から外れとこつか」

(……やっぱ自分は渦中の真っ只中にいるんだった)

ヘリポートにて、ティアナが恩師から直々に言われた第一声がこれである。

『ちょっとティアナ、みんな貴女を腫れ物でも触るような目で見てるじゃない』

『仕方ないでしょ。あんだけ思い詰めてた後なんだから』

ティアナの過去の記憶によると、この時のことは出来れば封印したい一コマとして残つてこる。

(確かあの時は思いつき口答えしてシグナム副隊長に殴られたんだっけ)

思い出すだけでも痛い。もうあんなことは「メンだ、とこうのが正直なところティアナの本音だったりする。

「あの、ティアナ？」

「はっ、はーー。」

「わざわざおもと類をわざわざひるがい……どうがしたの?」

「あ、えーっと、何でもないです、何でも」

「そり? ならいいんだけど……」

笑つて誤魔化すティアナ。すると、今度は全員から奇異なもので
も見るよつた田で見られてしまつ。

「おい、ティアナ」

「なんですか、ヴィータ副隊長」

「お前、本当にティアナか?」

「え……?」

「いや、あんだけぶちのめされた割に、あんまりにも立ち直るのが
早いもんだから……と、すまん。忘れてくれ。わかつてくれたなん
らそれでいいんだ」

どこか腑に落ちなさそつた様子のヴィータだったが、結局どうに
か無理矢理納得したらしく。

「おーい、皆さん方! 早く乗つりまつてくださいせー!」

ヴァイスの急かす声が聞こえる。

「それじゃあフォワードの皆はロビーで待機。ティアナは……後で、
わたしどお話しつね」

「あ、えっと……はー」

なのはの言葉に、ティアナは曖昧に微笑んだ。

「ティア、ホントにもう大丈夫なの？」

「ううさいわね。平気って言つてるでしょ？」

「で、でもあ……」

六課ロビーにて。フォワードメンバー全員が集合している中、ティアナはかれこれ20分ほど、スバルからの心配性攻撃を受けていた。

「でももへちまもないわよ！ あたしが大丈夫って言つてるんだから大丈夫なの！」

「うう……」

尚も食い下がるスバル。そんなスバルを小突くティアナ。思えばこんなやり取りでさえ懐かしくて、ティアナは思わず微笑んでしまう。

「……ティアさん、何だか嬉しそうだね」

「なのはさんに撃墜されて、何か吹つ切れたのかな？」

「なーに、そこのチビッ子一人。あたしがどうかした?」

「い、いえ! 何でもないです!」

「あ、あはは……」

『ジ』が遠慮がちなエリオとキャロ。ティアナはそういうば、と思
い出す。

(この二人と本格的に仲良くなつたのつて、確かにこの事件の後だつ
たつけ)

一人感慨に耽るティアナ。初めこそ戸惑つたものの、ルナが説明
をしてくれたおかげで大分状況が飲み込めた今となつては、見るも
の聞くもの全てが懐かしい。この世界の自分は、今この時のこ
とを後でどんな風に振り返るのだろうか。そう考えたところで、テ
ィアナは一つの疑問にぶつかった。

『あ、そうそうルナ』

『何、ティアナ?』

『私達つて元の世界から次元転送されてきたんでしょう? じゃあこ
の世界の元々の私達つて、一体どうなつてるの? あたしが一人い
たりとかはしないわけ?』

『うーん、その辺のこととは詳しく説明するとめんどくさいんだけど、
パンタシアの転送方法つて、ちょっと特殊なのよ』

『特殊?』

『そ。パンタシアは人を転送するとき、その人の身体を意識体に変換して、転送先の世界の同一人物に重ねる効果を持っている、っていつとわかりやすいかしら?』

『重ねるって、コニゾンみたいなもの?』

『概ねそんな感じね』

『ふーん。それにしても、ルナってやけにそのロストロゴギアに詳しいわよね』

『……調べたのよ。この一年間、無為に過ぐしてきたわけじゃないんだから』

『一年間ねえ……あ、そういうえばちょっと不思議に思つたんだけど』

『

「ねえ、ティア! ティアつてば!」

「えつ、ああ、スバル。どうしたの?」

念話に夢中で、周りに気を配るのをすっかり忘れていたティアナ。気付けばスバルが心配半分、不機嫌半分な表情で彼女を見ていた。

「どうしたの、じゃない! さつきからずっとボーッとしてるし、何だか今日のティアはおかしいよ! ねえ、やっぱり昼間の模擬戦のせいなの? あたしが失敗しちゃったから』

「スバル」

どこか思い詰めた様相を見せる若き親友に、ティアナは諭すように話し掛ける。

「あたしは本当に大丈夫。……今日の模擬戦でなのはさんが言いたかったこと、あたしなりにちゃんと納得出来たから。別に、あんたが何か悪いわけじゃないのよ」

「そうよ、スバル。本人が大丈夫って言つてるんだから、信用してあげれば？ あれだけ派手にやられた後だし、変な気を起こしたりはしないでしようよ」

「……うん」

ルナの後押しもあつてか、口^ヒもるスバル。その時、

「フォワードのみんなさ、ちょっと……いいかな？」

一条の閃光が迸り、刹那、ガジェット？型の一群が、黒々とした夜天から根こそぎ削り取られる。なのははその様子を確認すると、小さく頷いた。

「「こちらスター・ズ1。海上に確認されていたガジェットドローン、型を全機撃墜しました」

『了解。機体の残骸は海上観測隊に回収を依頼しました。スター・ズ1・2、ライトーング1は帰投してください』

「了解」

ロングアーチとの通信を終え、たつた今自らが守った空を見上げる。そんな彼女に近づく、赤い影が一つ。

「なのは」

「あ、ヴィータちゃん。お疲れさま」

「おひ、なのはもな」

スターズの二人は、静かな夜空を平行して飛んでいく。

「……なあ、なのは。ティアナのことだけさ」

ポツリと、ヴィータが言った。

「あいつ、本当にわかつたのかな。……なのはの、教導の意味」

「んー、きっと大丈夫だよ。ティアナも他のみんなも、賢くていい子だから」

「なのはがそう言つんなら、あたしはそれを信用するけどさ……」

なんか引っ掛かるんだよなあ、というヴィータの呟きは、近づいてきたヘリの音に飲まれて消えた。

「なのはさんは、みんなに自分と同じ辛い思いをさせたくないんだよ……」

六課ロビーにて。沈黙が支配する中、シャリオは静かな口調でそう言った。

シグナムとシャマル、当時をよく知る一人の説明を交えながら、自らが尊敬するなのはの過去を知ったフォワード陣は、皆一様に絶句していた。

今では親友であるフェイトとの、文字通り命懸けの戦い。決して譲れないものを賭けた、ヴォルケンリッター達との死闘。そのどれもが新人達の想像を絶するもので、今現在の彼女達の様子を見ていると、とてもではないが実際に起こった出来事として認識し難いほどの現実。

そして……凄惨な撃墜事件。生死の境を彷徨う程の重傷、痛々しい治療の様子と、辛いリハビリの日々。普段、明るく自分達に接してくれているなのはの壮絶な足跡を、通算二度目の視聴となるティアナも含め、全員が食い入るように見つめていた。

（やっぱり、なのはさん達から見たら、あたしはまだまだ若造か……）

念願の執務官になり、数々の難事件を手掛けてきたつもりでも、恩師とはまだまだ遙か遠い距離がある。ティアナは、改めてそう実感していた。

「次元が違うわね……魔力も、経験も、何もかもが規格外」

ルナがポツリと呟いた。

「まさか、なのはさん達の過去にこんな……わたし達と変わらない歳のはずなのに」

「……うん。大切なものを守るために戦つて、時にはすぐ傷付いたりもして……それが、隊長達の強さの理由なんだ」

エリオとキヤロは、たった今知った事実に衝撃を受けながらも、何とかそれを肯定しようとしていた。

「…………」

スバルに至っては、普段の彼女らしくもなく、ただひたすらに黙つて俯いているだけだった。

「ごめんね、みんな。いきなりこんな話なんてしちゃって。でもね、みんなにはわかつてほしかったんだ。……なのはさんの、教導の意味」

「……絶対に無茶をしないで、みんなが安全に帰つてこられるよう

ティアナの口から、流れるようにこぼれ落ちた言葉。そんな彼女

に一瞬なのはの影が重なった気がして、シャリオははつとしてティアナを見た。

「ティアナ……」

「『めんなさい。あたし、バカでした。弱い自分が許せなくて、それで、パートナーを危険な目にあわせるような無茶をして……それで、また自分が許せなくなつて、結局また迷惑かけるようなことをして……』

「ううん。ちがう、ちがうよ、ティア！」

ポツリポツリと語り始めるティアナを、不意にスバルが半ば悲鳴のような調子で制止する。

「確かに教導は無視しちゃつたかもしれない。でもさ、ティアだってただ自分なりに『強くなりたい』って思いで、どんなにキツイ状況でも切り抜けられるようにって、毎日毎日必死に頑張つて、努力してただけなんだよね？ それっていけないことなのかな？ ……ボロボロになるまで自主トレしてたティアの姿を、あたしは一番よく知つてる。なのに……あたつ」

そんなスバルの額に、溜め息をついたティアナがデコピンを一つ。

「つたく、あんたは優しすぎるのよ、スバル。いい？ あたしは確かに強くなりたいって思つてた。でもね、その『強さ』は、結局のところ自己満足のためのものに過ぎなかつたのよ。そんな自分勝手なエゴのためだけに、護るべき味方を誤射しそうになつた。……これだけで、あたしがどんなに身勝手で間違つてるか、あんたにだつてわかるでしょ？」

「…………」

「それにね……確かに、どうしようもなく切羽詰まっちゃって、無茶をしなくちゃならない状況だつてあるかもしれない。でも、少なくともアグスタのあの時は、味方を危険に晒してまで無茶をする場面じゃなかつた。……そうですね、シグナム副隊長？」

「…………今までわかつてゐるのならば、私から改めて何か言つことはない」

烈火の騎士の無愛想な肯定の返事に、ティアナは小さく微笑んだ。

「でも、ティアはそれでいいの？」

「あたしはこれでいいと思つてゐる。少なくとも、実戦でまた無茶をして、取り返しのつかないことになるよりは」

きつぱりとそう言い放つティアナ。スバルはしばらくの間、じつとティアナを見つめていたが、

「…………そつか、そうだよね。あはは、ティアは強いなあ……あたし、余計なお節介、だつたかな？」

「バカね。さつきも言つたでしょ、あんたは優しすぎるつて。……でもまあ、ありがと。あたしのこと心配してくれて」

「ティア…………うう、ティアあ～っ！」

「あ～、じり～、離れなさいよ～」

感極まつてティアナに抱きつゝスバル。シャリオを初め、その様子を微笑ましく思いながら眺める一同。

「……ああアツいアツい。まさに相思相愛ね」

「ルナ、なんか言つた？」

「いえ、別に」

ボソッと呟いたルナを、ティアナはジト目で睨み付ける。と、その時、上の階からロビーへ降りてきた人が一人。

「……なんだか、わたしが出るまでもなく終わっちゃつた、つて感じだね」

唐突にやつて来たのは、任務を終えて帰還した高町なのはその人だった。

「なのはさん！」

「ただいま、みんな。解散命令出てたみたいだけど、伝わつてなかつたかな？」

首を傾げるなのはを見て、あつと小さく声をあげるシャリオ。

「「「」めんなさい！ リイン曹長に任せつゝりで、つい……！」

「もひ、ダメだよシャーリー。ちゃんとオペレーターしてくれなきゃ。

……それで、みんなはここに集まつて何を見てたの？」

「え、いや、あの、それは……」

なのはに詫かれて、シャリオは慌ててスクリーンを閉じる。

「怪しいなあ……ルナ、教えてくれる?」

「えーっと、空のエースオブエースの波乱万丈な生き様を少々」

「それってつまり……シャーリー?」

「わああ、『めんなせご』『めんなせご』『めんなせい』……」

必死に平謝りを繰り返すシャリオに、元々怒つてなどいらないのははクスクスと笑った。

「でも、ティアナの様子を見る限り、わたしの恥ずかしい失敗談が役に立つたみたいだから、別にいいんだけどね」

なのははそう言つてティアナに向き直る。

「ティアナ、わたしの言つたかったこと、ちゃんとわかつてくれたよね?」

「はい、高町教導官。『まずは自分の得意な所を完璧にする』。あたしの射撃魔法だって、上手く使えばあんなに強くなるんだって

「……うん、これなら安心だね。ティアナ、ちょっとクロスミラー
ジュ貸してくれる?」

(やついえは、ダガーモードってまだ解禁されてなかつたつ)

内心苦笑しつつ、ティアナは素直に自らの相棒を手渡した。

「クロス//ラージュ、テストモードリース」

『Yes.』

「はい、ティアナ。命令してみて、『モードツー』つて」

「……モード・ツー」

『Set up. Dogger Mode.』

クロスミラージュの形状が変化し、何度もティアナの危機を救つた魔力刃が姿を現した。

「ティアナは確か、執務官志望だつたよね？ 執務官はどつしても個人戦が多くなつちやうから、いつかは必要になると思つて付けてたんだけど……ティアナ、焦つちゃつたんだよね。わたしの教導つて地味だから、強くなつてる実感がなかつたんだよね」

「……『めんなさい』」

やや自嘲的な調子のなのはの言葉に、咄嗟に否定したい衝動に駆

られる。だが、それを何とか抑えた口から代わりに出てきたのは、あの時と変わらない謝罪の言葉だつた。

「……うん。それじゃあみんな、今日はもうゆっくり休んで、明日からまた訓練頑張ろ？」

フォワード一回の威勢の良い返事で、その日の任務は終了となつた。

部屋に戻り、ティアナは今日一日のことを振り返る。ウイーナ遺跡で銀髪の少女ルナを見かけてからあり得ないことの連続で、まるで夢でも見ていくような気分だった。

(でも)

こんな夢なら、また見ても良いかもしない。心地よいまどろみの中、ティアナはそう漠然と思いながら、暗闇に意識を手放したのだった。

感想などお待ちしております。

訓練とアホ疑惑（前書き）

3000PV、500ニークアクセスを突破しました！ こんな拙作を読んで下さってる方に感謝感謝です！ 三話の終わりが明らかに尻切れトンボだったので、大幅に加筆しました。大変申し訳ございませんが、時間があるときにでもお読みください。

「ティア～、起きて～」

「…………」

「ティア～てばあ～」

「んー……」

「ティア～……えいっ」

「つーーー！」

セクハラをして、蹴り飛ばされるスバル。平行世界でのティアナの朝は、ある意味現状という理不尽な現実を忘れさせてくれるものとなつた。

「あんたはあ～！ セクハラはやめなさいって何年言い続ければ分かるのよ！ もう子供じゃないんだから、こんなバカみたいなことするんじゃないのー！」

「あ、いたいいたいいたい！ ティア～、『めんなさい～！』

必死に鳴くスバルに、ティアナは容赦なく制裁を加える。その内本当に泣きそうになつてきただので、お仕置きは終了となつたのだった。

「それにしても、なのはさん達って本当にスゴかつたんだねえ。昨日の映像、あれってなのはさん達が9歳の時のなんだよね？」

身支度を整え、一人で早朝訓練に向かう途中のこと。憧れオーラを撒き散らしながら、スバルがぼやぼやした様子で言った。

「そりやね。子供の頃から命懸けの戦いで鍛えられてきたんだもの。あたし達とは土壤からして違う」

「あたし達もいつか、あの人達と肩を並べて仕事が出来る日が来るのかな？」

「……あんたの努力次第ね」

「楽しみだなあ……よーし、今日も訓練頑張るぞー！」

ティアナの本音は、「スバルはともかく、自分はちょっと……」である。実際ティアナのいた新暦80年代には、スバルは更に優秀な魔導師へと羽ばたこうとしていた。それでティアナは卑屈になるか、と言われば、全くそんなことはなかつたのだが。

「二人とも遅いわよ」

ティアナ達が訓練場にやつて来ると、ルナとライトニングの一人は既に自主訓練を始めていた。

「「「めん」」めん、ティアがなかなか起きなくつてさ」

「あなたのスキンシップが余計な手間を取らせたからでしょうが「……どうでもいいナビ、わざと準備運動ぐらいしたら？ ケガしてもしらないわよ」

それからしばらく、教導官であるなのはがやつて来るまでの間、各々が軽く体を動かしていた時のこと。ティアナは昨日訊きそびれたことをいくつか、ルナに尋ねてみると「にした。

『ルナ、あなたって分隊はスターズ？ ライトニング？』

『私はライトニングよ。一応、ポジションはセンターガード。ただ、隊長戦みたいにフォワード全員で動く時は、キャロと同じフルバックも担当するわ』

『フルバックって、攻撃主体でつてこと？』

『ええ。アウトレンジからの長距離砲撃、ロングレンジからの支援砲撃が私の主な役割ね。ま、気休め程度なら補助魔法も使えるし、射撃も苦手じゃないから、結構自由に動けるんだけど』

遺跡での戦闘経験から、その実力はティアナも重々承知している。なるほど、彼女がいれば色々な局面で作戦の選択肢が増えるだろう。

『ただし、クロスレンジだけは勘弁ね。保身しか出来ないから』

『……センターガードも兼任するのに、それじゃ結構厳しいと思うけど』

「はーい、みんなー、集合ー。」

と、ここでようやくなのはの号令が入った。元気のいい返事と共に集合するフォワード一同。

「『めんね、ちょっと遅れちゃった。みんな、準備はいい？ 初めはそれぞれの基本の型をもう一度復習。今日はそれから次の訓練に入ろうか』

「「「「「はいっ！」」」」

「うん、いい返事。それじゃあ、始めよっか」

こうして、ティアナにとつては久しぶりとなる、なのはの教導が始まつた。

「ティアナ、ルナ、二人はシューティングターゲットってみよう。なのはの言葉と共に、林を模したバーチャル空間のあちこちに標的が配置されてゆく。

「今日は両者対抗で撃墜数を競つてもうつよ。二人とも、大丈夫？』

「はい、なのはさん」

「問題ありません、教導官」

口々に返事を返すティアナとルナ。

「じゃあ、始めるよ。レディー……ゴー！」

「いくわよ、クロスマリージュ。クロスマファイヤー……ショート！」

ティアナは号令と同時に十二発の魔弾を生成、それらを操つて四方八方の標的を正確に次々と破壊する。

「精密操作は苦手なんだけどね……アストラルシューター！」

ルナも負けじと蒼白の魔弾を八発放つも、数の差故にティアナの処理能力には及ばない。一人の得手不得手もあるが、ティアナが執務官として積み重ねてきた戦闘経験やスキルが、本来のこの時間軸の彼女のそれを格段に上回っていたのも大きかった。

当然、事情を知らない人間には昨日今日でいきなり動作が大幅に改善されたように見えるわけで、それは教導官であるなのはも例外ではなかつた。

「二人とも、ちょっとストップ！」

なのはの制止に、二人は何事かといった様子で彼女を見る。

「ティアナ、なんだか動きも魔法のキレも別人みたいに良くなってるんだけど……ひょっとして、秘密特訓とかしてたの？」

「え……それは、えっと……」

答えに窮し、気付かれないように視線でルナに助けを求めるティアナ。

『とつあえず、適当に誤魔化しどきなさこよ。下手に本当のことを言つと、精神異常で病院送りにされちゃうかもしないし』

「……その、すみません」

「うーん、別に謝る」とじやないんだけどね。ただちょっと……まあ、強くなるのはいいことなんだけど……」

ルナの助言通り、その場をはぐらかして凌ぐ。色々と困惑しているのは見て、これからは実力を出し控えようと決めたティアナだった。

「それじゃあ、朝の訓練はこれでおしまい。みんな、朝食をしつかりと食べて、午前の訓練に備えてね」

早朝訓練を終え、フォワード一同を一旦解散させた後、なのはも食堂へと向かった。まだ早いこの時間なり、『彼女達』はそこにはいるはずだった。

「はやてちやん、フロイトちやん

「ねー、なのはちやん。早朝訓練お疲れさま!」

「あ、なのは……」

彼女達はやてヒュイトは、やいわいのんびりした朝食を取つていた。

「…………あれ、ヴィータちゃん達はどうした
」一緒でいたりもしない。
「？」

「今日は艦艇もしくてなあ。ヴィータとシグナムは朝から海上観測隊のとじうてんせん張り

「昨日のガジェットについて、色々と用事があるんだって」

なのはは空いている席に座ると、お気に入りのモーニングセットを注文する。

「そつか、昨日の……おやか、撃ち漏らしどがなかつたよね？」

「安心しい。ロングアーチのモニターにはそれらしいもんは映つと
らんかつたし、何よりなのはちやん達がそないなミスをするはずが
あらへんよ」「み

「なら良いんだけど……」

からからと笑うはやで。なのははどこかまだちょつぱり不安そつな表情ながらも、運ばれてきた料理を口にする。

「……なのは、ひょっとして何か困つてる?」

「ふえつー? フハイトちゃん、どうしてわかったの?」

「なんだか今日のなのは、いつもより元気なさそうだったから」

「いやはは……フハイトちゃんにはお見通しだね」

フハイトの言葉に、照れ臭そつにまにかむなのは。

「それで、天下無敵のなのはちゃんはいつたい何をそんなに悩んでるん?」

「うん、実はね……」

なのはは箸を進めながら、ティアナについて感じた違和感を握り揃んで一人に説明した。

「ティアナが……?」

「んー、なのはちゃんがそつぱつといふんやし、何かの見間違い、つちゅつちゅともないんやうなあ」

「うん。初め見たときはびっくりしちゃった。だつて、これから直していくつて思つてたティアナの悪い癖が、殆んど直つてたし……」

「うーん、と頭を抱えてしまつ二人娘。

「けど、あのくらこの子ならこそなり急成長、なんてこと珍しく

ないとと思うよ？……私は実際に見てないから、まだなんとも言えないんだけど……」

「そやな。ティアナはまだ若いんやし、本人もわかつとらんかったような才能が開花したのかもしれんよ？」

「そり、なのかなあ？」

わたしの教導つて、役に立つてゐるのかなあ。ポジティブな親友二人の意見に、本氣でそう考えてしまはねはだつた。

午前の訓練では、ティアナは努めて手を抜いて行うように心掛けた。手を抜くなど、万一なのはに知れたら言語道断で制裁を受けるような行為だが、今はティアナの特殊すぎる身の上がそうさせざるを得ない、というのが現実だつた。

しかも今朝以来なのはは特にティアナを注視してゐるらしく、ティアナにとつては色々な意味でフレッシャーとなつてゐるのであつた。

「はーい、みんな集まつてーー！」

そして今。午後の訓練も中盤に差し掛かった頃、ついに本日最大の試練が始まろうとしていた。

なのはの号令に集まつたフォワード一同が目にしたのは、ズラリ

と一列に並んだ隊長陣の姿だった。

「今日は隊長戦をするよ。みんな、まだ付いてこれる?」

「…………」

□では威勢の良い返事をするものの、ティアナは内心、この実戦により近い訓練を危惧していた。

実戦に近い、それは即ち、手を抜くことが難しいとも言える。もちろんわざと被弾して早期撃墜される、といつ手も無いわけではないが、流石にそんなことをすれば、手抜きをしていることが一発でバレてしまう。

どうしたものか……。ティアナは必死に頭を巡らせるのだった。

『フエイトちゃん、わたしが今朝言つたこと、覚えてる?』

一方のなのは達は、念話にて秘密の念話中。内容は、勿論ティアナについてだつた。

『うん、なのは。ティアナが不自然なくらい強くなつてるんだよね?』

『そつなの。今朝以降は田立つた動きは無いんだけど、やっぱり気になるから』

『わかった。私もよく見ておくね』

『お願いね。えっと、ヴィータちゃんとシグナムさんは……』

『話は聞かせてもらつたぞ。まさかそこまで強くなつてゐるのは信じられねえが、まあ、あたしとアイゼンがこの田で見極めてやるわ』

『私はたとえ何があつと、ただ田の前の相手を斬る。それだけだ』
『にやはは……』

いつも通りの二人に、苦笑するなのは、
ティアナに（とつては不本意な）注目が集まる中、今、戦いの火
蓋が切つて落とされようとしていた。

訓練とアート疑念（後書き）

どうもここにちま、風刻とうものですね。

今までまともに後書きを書いていなかつたわけですが……その姿勢を反省して、今回からは書いていこうと思います。

とこいつことしまず、作品について弁明じみたことをやせていただきます。

作中で細部の描写が原作と違つておりますが、作者の勝手な都合です。申し訳ありません（――）も決してつる覚えだつたとかではありません

あと、影が薄いキャラが何人かいますが（ヒロキヤロ等）これから改善していく予定なので、どうか辛抱強くお付き合いく下さい。

次回は隊長戦と、ティアナのホームシックを予定しています。不定期更新ですが、気長にお待ちください。

では、感想などお待ちしております。

隊長戦（前書き）

隊長戦の描写が予想以上に多くなってしまったので、ティアナのホームシックは次回へ持ち越します。

隊長戦

清々しいほどに晴れ渡った空の下、ティアナ達フォワード陣は、来るべき隊長戦に備えて、ブリーフィングをこれでもかとこじらかに行っていた。

「じゃ、あたし達の作戦をもう一度確認するわよ」

ティアナが仲間の顔を見回して言った。

「砲撃を撃たれると厄介だから、スバルはなのはさんの気を出来るだけ引いて。くれぐれも無理して撃墜されないよ！」

「オッケー、任せとー！」

「エリオは一撃離脱の高機動戦闘に終始。あたしやキャラ、ルナなんかを狙うフロイト隊長達を妨害」

「はい、頑張ります！」

「キャラはスバルとエリオの強化をお願い。特にエリオにはスピード重視。勿論、余裕があれば他のみんなの支援もね」

「は、はい、頑張つてみます！」

「ルナは砲撃と射撃を使い分けて、エリオ達の対処に夢中になつて相手を不意打ち。出来るだけ相手に見つからないよ……誤射しないでよ？」

「了解。やれるだけやってみるわ

「で、あたしは必要な指示を出しながら射撃でサポート。具体的には一対一なんていう状況にならないように妨害をしたり、挟み撃ちで一気に置み掛けたりね。何か質問は？」

ティアナはもう一度全員を見回すが、どうやらこの作戦で納得してくれたようだつた。だが優秀な指揮官は、士気が落ちない程度に作戦の穴についての説明をすることも役割なわけで。

「後、薄々わかつてるとは思つけど、一っここの作戦の難点を挙げる」としたら、とにかく火力不足だつてこと。対策としては、こっちの戦力を集中しての各個撃破が一番有効。だから決定的なチャンスにはこつちから攻撃指示とかは出すけど、基本は防御を固めながら各自が相手の隙を探して、逃さずそこを突く。いいわね？」

「「「「了解！」」」

頼もしい返事に、自然と笑みが零れる。ふと隊長達の方を見てみると、あちらはもう準備万端のようだつた。

「じゃあ最後にルールの確認をするよ。わたし達隊長チームは一撃でも入れられたら撃墜。フォワードチーム全員が撃墜されるか、隊長チーム全員が撃墜されたら試合修了。みんな、準備はいい？」

静かな訓練場に相対する、フォワード一同と隊長陣。両者ともこ真剣な面持ちで、訓練とはいえ、どちらも本気なのだということを如実に物語つっていた。

「ヘドロイー……」

全員が来るべき時に備えて身構える。一瞬の緊張が走り、そして

「……『ノーノー』」

戦いが、始まつた。

「うおおおおおッー！」

「甘いよ、スバル！」

ウイングロードを駆けてきたスバルの、速度を乗せた強烈な一撃。なのははそれを冷静にプロテクションで受け止め、アクセルシューターを操り反撃を入れようとする。

だが、攻撃が失敗したと見るや否や、スバルは一目散に退避。シーラーはどこからか飛んできたティアナの魔弾に相殺されてしまう。

「なんだか、今日はみんな消極的だなあ」

一息ついたのはは、警戒がてら周りの様子を見渡してみる。

パツと見で一番目立つのは、場内を縦横無尽に駆け回るエリオの姿。キヤロの強化魔法が掛けたるのか、機動力はば抜けて高い。後衛を攻撃しようとするヴィータやシグナムに、そのスピードをもつて攻撃を繰り返している。ただ、どれもバリアジャケットに一撃入るような重いものではなく、単に相手の気を逸らす為の牽制のようだった。おまけに、そんな煮え切らないような態度をとり続けるエリオにヴィータが痺れを切らして決戦を挑めば、そんな彼女の背後に向かって、ここぞとばかりに砲撃やら射撃やらが飛んでくる。無論、ヴィータがそんなことでやられるわけではないのだが、一連の「いやがらせ」が彼女を苛々させているのは確かだった。

シグナムはシグナムで、時折現れる幻影に悩まされているようだつた。エリオの妨害が途切れた時を狙つてキヤロに接近するも、斬つたと思えば幻影で、おまけに出所不明の射撃魔法による集中砲火を受ける始末。それに対処したと思えば今度はエリオの不意打ち気味の一撃。端から見ていても恐ろしく戦いにくそうだった。

そして、スバルが度々ちょっかいをしかけてくるせいで、なのはが二人への支援が中々出来ないでいるのも、この膠着状況に拍車をかけていた。

「やつぱり、ティアナだよね……」

スバルやエリオの性格からして、ここまでいやらしい戦い方を好むとは思えない。となると十中八九、ティアナの発案だろう。今は隠れているのか姿が見えない彼女は、流石はチームの中核として抜擢されただけある。

幻術や射撃の使い方なども、まるで何度も実戦を経験してきたかのように巧妙で、なのはの抱いていた疑念を裏付けるものだった。はやての言う通り、これがティアナの隠された才能なのかも知れない。

再び突撃してこようとするスバルに注意を払いつつ、そんなこと

を考えていたのはであった。

一方、膠着状態の続く最前線を一步離れた林の中。低空での哨戒飛行をしているフェイイトは、なのはのお願いに応えるべく、ティアナの姿を探し続けていた。

「……見つからない。もう三十分も経ちそうなのに」

バーチャルでの再現とはいえ本物そつくりの木々達は、潜んでいる者の身をしつかり隠す。ティアナが目立つて大規模な攻撃をしかけていないのもあって、発見は困難を窮めていた。

諦めて前線に向かおうか、とフェイイトが考え始めたとき、彼女の近くの空に向かって、唐突に蒼白い砲撃魔法が放たれた。狙いはスバルと小競り合いを繰り返しているなのはで、撃墜こそしなかつたものの、スバルが逃走する隙を作るには十分な威力だった。

（あれは、ルナの……？）

フェイイトは速度を上げて、砲撃の発射地点に急ぐ。やがて茂みの先に、銀の弓を構え、再び誰かに狙いを定めているルナを発見。再度の砲撃を阻止すべく、フェイイトはフォトンランサーをルナの背中目掛けて撃ち放った。

「！」

だが、直前で感付かれたのか、横方向へ転がるようにして雷弾をかわすルナ。

振り返つてフェイトの姿を確認したルナは、苦々しげな表情で舌打ちをした。

「テスター・サ隊長……」

「林に隠れて前線支援。中々いい作戦だね」

「……考えたのは、ティアナですから」

そう言って、ルナはフェイトに弓を向ける。応じて、フェイトもバルディッシュュを構える。

「……いくよ」

『Haken from .』

刹那、フェイトは鎌状の魔力刃を展開、持ち前のスピードでルナに接近、そのまま斬りかかる。

だが、フェイトの攻撃を見越していたのか、ルナは初撃を余裕を持つて回避する。そして逆に、至近距離から八発の誘導魔力弾を放つ。

虚を突く形の攻勢で短期決戦に持ち込もうとしていたフェイトは、ルナの予想外の抵抗に戦術変更を余儀なくされた。自らに迫る魔力弾を切り裂き、あるいはラウンドシールドで防御しつつ、ルナに再度の攻撃を試みる。

「ムーンライトカノン！」

チャージ時間の短い、ルナオリジナルの砲撃魔法がフェイト迎撃に放射される。だが、高機動戦闘を得意とするフェイトは、それを

難なく回避。そのままルナの真横に回り込み、無防備な彼女を真一文字に薙ぎ払つた。

「つあ！」

咄嗟にシールドを展開したルナだったが、それでは到底フェイトの勢いを殺しきることは出来ず、あえなくシールドは破壊。吹き飛ばされたルナは木に激突。そこに間髪入れず、フェイトはフォトンランサーを数発、止めどばかりに撃ち放つ。

対して、ルナはダメージを負いつつも魔力弾を生成、フォトンランサーと相殺させてギリギリ直撃を回避。

「やるね、ルナ」

「訓練の賜物です」

そして、再び対峙する形となつたルナとフェイト。意外にも、先手を打つたのはルナの方だった。

「クレセントスラッシュジャーー！」

「！」

ルナの手から三日月状の魔力刃が放たれる。虚を突こうとして逆に突かれてしまったフェイトは、ブーメランのように回転しながら高速で飛来する魔力刃を、間一髪バルディッシュで受け止める。

「ルナティッククアロー！」

続いて迫り来る矢の嵐。魔力刃を弾き飛ばしたフェイトは、今度

はそちらの対処に追われてしまつ。一撃でも貰えばアウトのフェイトにとつて、無数の矢が勝手な軌道を描いて飛んでくるこの魔法は、特に対応が難しいものの一つだった。自らの展開する防壁の中で止めされたフェイトは、ルナの次の一手を予測しつつ、反撃の時を待つ。

やがて嵐が途切れると、フェイトはルナに攻撃を仕掛けるべく飛び出した。そんな彼女を、ルナの近距離砲撃が襲う。だがこの瞬間、二人の勝敗は決した。

『Sonic move.』

フェイトは砲撃を一瞬の加速で回避すると、反動で動けないルナ目掛けて、バルディッシュの刃を降り下ろす。

シールドすら張れず、魔力刃を直に受けてしまったルナは、膝をつきその場に崩れ落ちた。

「ルナ！」

そんな彼女を、慌てて抱き起こすフェイト。

「ごめん、痛かつた……よね？ 大丈夫？」

「……はい、平氣です。魔力ダメージが響いただけですから」

不安げにデバイスの設定を確認するフェイトに、ルナは苦笑して言った。

「そつか、よかつた。ルナ、戦いかた上手くなつたよね。あの近接戦の魔法、クレセントスラッシュャーだけ。ちょっとびっくりしちやつた」

「ありがとうございます。……テスター・ロッサ隊長のものを参考にしてましたので」

ルナはようやく立ち上がり、訓練場の外に向けて歩き出す。

「ルナ、大丈夫？ 肩貸そつか？」

「心配しないで下さい。大丈夫ですから」

「そり……じゃあ、気を付けてね」

「お気遣いありがとうございます。隊長も、『武運を』

そう言い残して、ルナは林の奥へと消えて行く。フェイトはその後ろ姿を確認してから、再びティアナ捜索の哨戒飛行を開始した。模擬戦開始から三十分余り、ティアナの敷いた布陣に綻びが生じた瞬間だった。

『じめんなさい、テスター・ロッサ隊長にやられちゃった』

ルナの念話がフォワードチーム全員に届けられたのは、それからすぐのことだった。

『あの、気にしないでください。フェイトさん、強いですか？』

『ルナさん、お疲れ様です。砲射撃支援助かりました』

『お疲れー。後はあたし達に任せて、ルナはゆっくり休んで！』

三者三様の反応を見せるフォワードチーム。だが、何故かティアナからの連絡がない。

『ええ、みんなありがとう。それじゃ、私は早めに退場させてもらいうわ。……えっと、ティアナ？』

『……うん、お疲れ様、ルナ。フェイト隊長の動向が分かつただけでも結果オーライ。それとお疲れ様ついでに、全員に連絡ね。ルナが抜けちゃったから少し作戦変更。あたしが前線に出るから、みんなフォローお願い』

しばらくしてなされた、ティアナからの業務連絡。その声音には焦りの色が浮かんでいた。

今ティアナがいるのは、隊長チームの誰とも決定的な接触を避けられる距離にある、小さな木立の一角。自らは支援に徹するつもりでいたティアナだったが、隊長チームの予想以上の防御能力の高さに、当初予定していた一斉攻撃をする機会もないまま、チームメンバーの撃墜という事態を招いてしまった。

ルナが脱落したことにより、前線で張つている二人の負担は格段に増した。元々ギリギリで動いていたスバル達の疲労は凄まじく、このままでは撃墜は時間の問題だと感じたティアナは、自ら前線で戦つことを決意したのだった。

(どのみち、ここに留まつてたらフェイトさんにやられそうだしね)

ルナがやられたということは、フェイトはこの林の中をひたすら索敵しているに違いない。じきにここにもやつてくるだろう。

不意打ちでやられるよりも、自ら攻撃に参加してスバル達の負担を減らす。勝つためにはそれしかない。

大きく深呼吸したティアナは、エリオ達の戦っている前線へと駆け出した。彼女の頭には勝利への様々なシミュレーションが浮かび、そして消えていく。そこに「自重」の一文字は無く、ともすれば自分が平行世界から来たことさえも忘れているのではないか、というほどに、ティアナはこの戦いにのめり込んでいた。

「はああああッ！…」

飛び上がり、相手上方からの一突き。完全な奇襲のつもりだったそれは、相手の俊敏な反応により受け止められてしまう。カウンター気味に振るわれる鉄槌を紙一重で避けながら、エリオはそろそろ限界が近いことを感じていた。

「どうした、エリオ！ 動きに霸気がねーぞ…」

「すみません、ヴィータ副隊長！」

「謝つてるヒマがあつたら攻撃して、みろ！」

再び襲い来る鉄槌。それを大きく後ろに跳んでかわしたエリオは、ストラーダを中段に構え、

「スター・ルメツサー！」

刃に雷撃を付与した一撃を、追撃を仕掛けようとしていたヴィー

タのグラーフアイゼンに叩き込む。キャロのツインブーストが掛かっていない分威力は劣るが、それでもヴィータの連撃を止めるには十分だつた。

魔力付与されたデバイスが打ち合つたことにより、エリオはその衝撃で後方に吹き飛ばされる。対するヴィータも、体勢は崩さないまでも大きくノックバックしてしまつ。

「そろそろ引き際かな。キャロは……！」

エリオは持ち前の身軽さですぐさま体勢を整えると、一撃離脱の作戦通り、ヴィータを深追いせずにその場を離脱する。追撃を警戒しつつ周囲を確認した彼が目には、今にもシグナムに撃墜されそうになつてゐるキャロの姿だつた。

「キャロ！」

『Messer angriff.』

ストラーダを構え、一直線にシグナムへ突撃するエリオ。

「む、レヴァンティン！」

『Sturmwinde.』

彼の気配を察知したシグナムの放つた衝撃波が迫る。程なくして直撃するも、エリオはメッサー・アングリフの勢いを以てそれを突き抜け、シグナム目掛けて突つ込んだ。

だがシグナムは直前でパンツァーシルトを展開。陣風で勢いの削がれたエリオを受け止め、弾き返す。そして体勢を崩したエリオに、容赦無く斬撃を加える。

「くあッ！」

防御仕切れず地に叩きつけられるエリオ。そんな彼に止めを刺そり、シグナムはレヴァンティンを構え直す。

「紫電……一閃！」

「エリオくん、危ない！」

『Protection.』

シグナムの放った炎熱の斬撃を、間に飛び込んだキャロのプロテクションが防ぐ。なのは直伝の守りの魔法は、見事に紫電一閃を止めて見せた。

「あ……ありがとう、キャロ」

「ほつ、中々やるな。流石はなのはに仕込まれているだけある」

体勢を立て直したエリオは、キャロと共にシグナムと相対する。斬るか斬られるか、緊迫の時間が流れ、

「シュワルベフリーゲン！」

「！？」

突如後方から、ヴィータの射撃魔法が飛来。シグナムとの戦いに全集中力を注ぎ込んでいたエリオ達は、ヴィータに対する警戒を完全に怠っていた。

弾き出された鉄球は直撃コース。避けようにも少しでも隙を見せればシグナムの攻撃に晒される。エリオとキャロ、少なくともどちらかの撃墜を覚悟した、その時。

「シユートー！」

不意に飛来した十一発のオレンジ色の魔力弾が、ヴィータのシユワルベフリーゲンを相殺。更に残りの誘導弾がシグナムとヴィータに襲い掛かる。

それから時を置かずして、ティアナが林の中から飛び出してきた。

「ごめん、二人ともお待たせ！」

「ティアナさん！」

「ヴィータ副隊長はあたしが相手するから、あなた達はシグナム副隊長をお願い！」

現れたティアナは、エリオ達にそれだけ指示すると、自らはヴィータと対峙する。

「誘導弾十一発の同時操作か。なるほど、なのはが驚いてたのも頷ける話だ。……それが張りぼてに過ぎねーのか歴とした実力なのか、この鉄槌の騎士ヴィータがしつかり見極めてやるーじゃねーか」

ティアナにグラーフアイゼンを突き付けながら、ヴィータは不敵に笑つたのだった。

地上でエリオ達が奮戦している時、空ではスバルによる絶え間ない牽制が続いていた。

「リボルバー キヤノン！」

スバルの放つ拳が、なのはの魔法障壁に阻まれる。対象に圧倒的な破壊効果を及ぼすスバルの技を、魔力リミッターというハンデ付きで防ぐには、なのはと謂えどもかなりの集中を要する。とてもではないが地上への本格的な支援をするだけの余裕はなかつた。おかげにスバルの常人以上の体力が、この牽制攻撃を長時間に渡つて継続させていた。

（こままだと地上が危ないかな。出来ればまずスバルから墜としたいんだけど……）

無論なのはの実力を以てすれば、まだまだ未熟者に過ぎないスバルの一人や二人、簡単に撃墜してみせるだろう。ただ、なのはにはそれを実行出来ない理由があつた。

（どうしても、ティアナの動きが気になるんだよね）

先程から時たま飛来するティアナの魔力弾。見かける度に撃ち落とすようにはしているが、その動きがまるで自分の隙を伺つているかのようなので、なのはは思い切つた行動に移れないでいたのだった。

（どうしようかなあ……）

『なのは』

悩むなのは、不意に念話が入る。フェイトからのものだった。

『どうしたの、フェイトちゃん』

『さつきルナを撃墜したんだけど、なのは、何だか苦戦してる?』

『うーん、苦戦つていうより、少し動きにくくなつて。あ、そうだ。フェイトちゃん、ちょっと援護してくれる?..』

『援護?』

『うん。ティアナに狙われてるわたしの代わりに、スバルを撃墜してほしいの。頼まれてくれる?』

『わかった、今そつちに急行するね』

スバルが突撃してきたことにより、フェイトとの念話はそこで途切れた。

ウイングロードを疾走してくるスバルの迎撃

に、アクセルシユーターより速度・威力共に劣るも、その分機動や他の魔法に余力を割けるディバインシユーターを放つ。ディバインバスターと並んでなのはが9歳の頃から慣れ親しんでいるこの魔法は、彼女にとつてはまるで息をするかように扱えるものだった。

一発、一発なら簡単に防御出来る代物も、十を越える数となると話は違つてくる。それが熟練の魔導師に操作されたものならば尚更だ。スバルは初めの数発は防御したものの、いよいよ弾幕が激しくなると、効果範囲外へ撤退せざるを得なかつた。

そしてそんなスバルの背を追う、一筋の金色の光。スバルが気付いた時には、それはもう目前に迫つていた。

雷の大鎌が、スバルの体を捕らえる。同時にディフェンサーが発

動し、加えて防御姿勢を取っていたスバルは、衝撃でかなり軌道を逸らされるも、なんとか撃墜はされずにいた。

「くうひ……ふ、フェイト執務官……！」

ただ、やはり負ったダメージは無視できないものがある。次に大きな一撃を受ければ、今度こそ撃墜は免れない。

スバルはトップスピードでワイングロードを疾駆する。対するフェイトも、自身の高機動性を生かしてスバルに並走する。

再び振るわれるバルディッシュ。それをリボルバー・ナックルで掴み取ると、カウンターで蹴りを繰り出す。続いて空いている手での魔力を込めた拳。シュー・ティングアーツの得意なスバルにとつては、得物を封じられた戦いには一日の長があつた。

だが、フェイトも黙つてやられる訳ではない。無詠唱でフォトンスフィアを生成すると、ただでさえ高速のフォトンランサーを、至近距離からスバルに発射する。結果は無論直撃。スバルはワイングロードから投げ出され、重力に任せて自然落下する。

しかし、それも一瞬のこと。すぐさま道を張り直すと、フェイトに向かって一直線に方向修正。短距離突撃を開始する。まさかここまで早く攻撃に転じるとは思つていなかつたフェイトは、ほんの僅か初動が遅れ、それが致命的なミスとなつた。スピードに特化したフェイトの防御能力では、到底スバルの拳を耐えることは出来ない。

「リボルバー……」

高まる緊張。決まれば勝利のこの一撃に、スバルは全身全霊で臨み、

「シュー」

だが、その拳がフェイトに触ることは遂になかった。 レストリクトロック。設置型の強力なバインドが、スバルをフェイトの目前で拘束していた。

「これって、なのはさんの……！」

「残念だつたね、スバル」

「そ、そんなあ……」

ガクッと項垂れるスバル。この状況では、どうあがいたつてスバルに勝ち目などない。実質的な撃墜だつた。

撃墜判定を受けたスバルはバインドから解放され、フェイトと共になのはの元に向かう。

「二人ともお疲れ様。援護ありがとう、フェイトちゃん」

「ううん、ここそこありがとう。ちょっと油断しちゃつたから、なのはの援護がなかつたら、きっと負けてた。……スバルも、そんなに落ち込まないで？」

「そうだよ、スバル。ここから見てたけど、スバルはちゃんと強くなつてゐるんだから。次、また頑張りう」

「はい……でも、悔しいものは悔しいです」

フォローしてくれる隊長一人に、スバルは少し拗ねた調子で答える。それを聞いたなのは達は、顔を見合させてクスクスと笑つた。

「大丈夫、スバルはもっと強くなれる。いつかきっと、わたしやフ

「ヒイトちゃんとも互角に戦えるようになるさあだよ」

「うん、私もそう思う。だから今は」の悔しさをバネにして、なのは隊長の教導をしつかり吸収しよう。

「や、そうですか？　くう～、隊長達にそつ言わると元気でちやこますね！」

単純と言ひべきか、口口ッと態度を変えて上機嫌になるスバル。

「それじゃあたし、隊長達の邪魔にならないよつに隅の方で待機してますね！」

上機嫌のまま、スバルは地上へと駆け降りていく。なのは達はその様子を微笑ましく見ていたが、スバルと入れ違いに視界に映り込んだ人影が、なのは達の表情を一変させる。

「なのは、あれ……」

「うん。ティアナだね」

林の中から現れたティアナは、交戦中のエリオ達を見ると、立ち止まって魔法陣を展開。ティアナの十八番とも言える魔法、クロスファイヤーシュートを放ち、エリオ達に奇襲をかけたヴィータの射撃魔法を相殺した。

「私、ちょっとシグナム達を援護して……」

「待つて、ヒイトちゃん」

加勢しに行こうとしたフロイトを制止するな。

「もうひとつだけ、様子を見よ。」

そう言つなのは田は、しつかりとティアナのことを注視していた。まるで、化けて出た魔物の正体を見破つてやううとも言うかのよ。

「いくぞ！ ラケーテンハンマー！」

先に仕掛けたのはヴィータだった。

ロケットエンジンの如き機構で推進力を得たヴィータは回転しながら加速し、ティアナに鉄槌を叩き込むべく突貫する。

ヴィータの攻撃に小手先の防御が役に立たないことを嫌というほど知っているティアナは、文字通り「必死」に回避する。代わりに犠牲となつたバーチャルの木が、凄まじい音を立てて折れ飛んだ。

その恐ろしい光景に冷や汗を垂らしながらも、ティアナは冷静にヴァリアブルバレットを三発撃ち込む。バリアやAMFを突破することを主目的とする多重弾殲射撃は、土埃で視界が悪くなつている中でも、正確にヴィータを狙つていた。

「なめんなつ！」

「！？」

だがヴィータは、それを待つてましたとばかりに、野球よろしく次々とグラーフアイゼンで打ち返す。一発目と一発目が相殺、三発目はあるうことかティアナに向かつて飛んできた。

予想外の対応に驚いたティアナだが、慌てて防御行動をとるようなことはせず、地面に倒れこむような形で回避する。対処に時間のかかる多重弾殻弾を防御すれば、次の瞬間には鉄槌の鎧になることは目に見えている。そんなことはご勘弁願いたいティアナには、多少無理をしてでも避ける必要があった。

そんなティアナを、ヴィータのテートリビ・シュラーグが襲う。単純な殴打だが一撃一撃が破壊的な威力を持っているので、当たればひとたまりも無い。

一撃、一撃、鉄槌が振るわれる度に大きく陥没する地面。ティアナは紙一重で避けきると、射撃で牽制を加えながら林の中に逃げ込む。逃がしてなるものかとそれを追うヴィータ。

「いない……？」くそつ、ビートに行きやがった

だが、後を追ってきたヴィータは、見事にティアナの姿を見失ってしまった。一旦心を落ち着かせ、五感を研ぎ澄ませるヴィータ。微かに落ち葉を踏みしめる音がした。

「！ そこだつ！」

刹那、単発の鉄球を音源に撃ち込む。コンマ数秒で目標地点に着弾したそれは、轟音を立てて炸裂する。

そして一瞬の後、ヴィータが目にしたのは撃墜されたティアナではなく、己を包囲したオレンジ色の魔力弾の群れだった。

（！？ 畜生、嵌められた！）

ヴィータは反射的にパンツァーヒンダネスを展開。直後、魔力弾が一斉にヴィータへと襲いかかる。

爆発に次ぐ爆発。衝撃で震えるバリア。時間にして僅か数秒間、しかし体感ではずっと長く感じる攻撃を耐えきったヴィータは、しかしそれで油断せずにすぐさま周囲を見渡す。標的はすぐに見つかった。

「シユワルベフリーゲン！」

四発、そしてまた四発、合計八発の鉄球がティアナの隠れていた場所に着弾する。

直撃を恐れたティアナは、堪らずヴィータの前に姿を現す。ニヤリと笑うヴィータ。

「トフップたあ、おもしれー」としてくれるじやんか、ティアナ

「あんなに弾幕を張つたのに落ちない副隊長も副隊長です」

「はん、じゅとり部下に簡単にやられるわけにはいかねーんだよ

しばしの睨み合いの後、ヴィータは高速でティアナとの間合いを詰める。同時に、ティアナは生成した魔力弾を撃ち出す。

撃たれた魔力弾は、しかし、ヴィータを捉えることはなかつた。といつより、そもそも彼女を狙つてすらいなかつた。

「な……！」

魔力弾はティアナの足元の地面で炸裂。もうもうとした砂煙を巻き起こす。眩ましをされたヴィータはやみくもに突撃するわけに

もいかず、その場で歯噛みするしかなかつた。そして煙が晴れた時、ヴィータは自らの視界に飛び込んできた光景に目を丸くした。

シュー・ティング・シルエット。現実と虚構の交錯が織り成す、攻防一体の奥義。茂みの中から木の上まで、沢山のティアナが銃を構えてヴィータに狙いを定めていた。どれが本物なのか、どれが偽者なのかを判断する間もなく、総攻撃は開始された。

周囲三六度から飛来する魔力弾。その全てが本物というわけではないが、一瞬では判断がつかないため、結果的に全て避けざるを得ない。つまり無駄な労力を使う、ということは、ヴィータにとってかなりの負担となつていた。

「くそっ、幻術なんてめんどくせーもん使いやがつて……なら、こっちにも考えがある！」

たん、と一飛びで空中へと舞い上がる。真贋入り交じつた魔力弾が空中のヴィータを狙うも、空中で機動力の上がつた彼女相手に、全て易々と避けられてしまう。

「アイゼン！」

『Giga ntform』

グラーフアイゼンが、ヴィータの掛け声と同時に彼女の体格の何倍もある巨槌に変貌する。ヴィータはそれを盾のようにして魔力弾を防ぎながら、そのまま眼下に向かつて突撃する。

「爆ぜろー、ギガントハンマーーー！」

グラーフアイゼンが接地した瞬間、そのとてつもない破壊力により轟くような地響きと周囲一帯に広がる衝撃波が発生。ティアナの

シューーティングシリエットは、その天をも揺るがすほどの衝撃を受け尽く消え去った。

これほどの攻撃を受けては、幻影のみならずティアナ本人も決して無事では済まされない。衝撃波に巻き込まれた彼女は塵のように吹き飛ばされ、土埃の中に消える。

まるで隕石が落下したかのようなクレーターを残しつつ、ヴィータはゆらりと立ち上がる。圧倒的な火力を見せつけながらも、その目は勝利に勝ち誇るようなことは無い。

「おいたティアナ、おめーこの程度でへばつたとかいうんじゃねーだろーな！」

「まさか！ まだまだ行けます！」

煙の向こうで声がしたと思えば、ヴィータに向かつて数発の魔力弾が飛来する。パンツアーシルトでそれを防ぎ、ヴィータは弾源とおぼしき場所に鉄球を撃ち込む。が、明確な手応えはない。

舌打ちをするヴィータ。そんな彼女の背後に光る、オレンジ色の魔力光。ヴィータがそれに気付いた時には、既にティアナの準備は整っていた。

「ファンタムブレイザー！！」

ティアナの魔法の中でも大威力を持つ砲撃が、ヴィータに向けて放たれる。オレンジ色の魔光は、寸分違わず直撃コースを駆け抜けた。

（やつた！？）

色々な条件が重なつて撃つことが出来た、必殺の魔砲。ティアナ

が半ば勝利を確信した、その時、

「コメートフリーゲン！」

「！？」

不意にティアナの頭上から、巨大な鉄球が襲いかかる。砲撃の反動で動けないティアナは、一瞬自らの負けを悟った。

だが、幸い鉄球はほんの少しティアナから離れた場所に着弾。ティアナは爆風と破片の嵐を受けたものの、撃墜されはしなかつた。

（あ、危なかつた……っ！）

再びゲリラ戦を試みようと、林に逃げ込もうとするティアナ。だが、右足の激痛がそれを制する。爆風に煽られた際に挫いたらしい。びっこをひくティアナを見て、ヴィータもその事実に気付く。ハンデを負つた兵は的にしかならない。次の一撃が勝負を決すると踏んだヴィータは、渾身の力を込めて突撃する。

怪我で回避もままならない状態のティアナは、仕方なく迎え撃つ体勢に入る。ここまで追い詰められてもなお、その瞳は逆転勝利への可能性を見据えていた。

（ヴィータ副隊長相手に、あたしのバリアがどこまで持つかはわからない。けど一瞬でも耐えられるなら、その一瞬で一撃決める！）

「ぶち抜けえええッ！！」

目の前まで接近したヴィータが、容赦なく鉄槌を振るう。ティアナが展開したバリアに、嫌な音を立てて亀裂が走る。バリアが完全に破壊される前に、ティアナはクロスミラージュの

銃口に魔力刃を発生させる。　　ダガーブレード。ティアナにとつてはトラウマ物の魔法。

ダガーブレード。ティアナにとつ

（届け、届け、届け！！）

バリアの亀裂が広がり、もうこれ以上の維持が不可能となつたとき。決死の覚悟で振るわれたダガーブレードが、ヴィータの騎士甲冑を切り裂いた。

同時にバリアが破れ、ティアナに鉄槌の洗礼が訪れた。重い衝撃が体を刺し貫き、視界が黒く霞む。「勝つた」という事実に漠然とした思いを抱きながら、ティアナの意識は急速に闇へと沈んでいったのだった。

隊長戦（後書き）

いつも、風刻です。拙作を読んで下さっている皆様、本当にありがとうございます。第五話はいかがだったでしょうか？ 結構戦闘描写を頑張って書いてみたんですが……改めて見ると凄いグダグダ感が○rn

てなわけで、本編の話はこれくらいにして、今回は後書き欄を使ってオリキャラのプロフィールを紹介したいと思います。何かとティアナ達に絡んだりしますが、（主に作者の表現力不足により）イメージしづらいかと思いますので、ご参考に。

名前：ルナ＝モーロック

性別：女性

年齢：16らしい。元の世界と平行世界とで、何故か見た目がほとんど変わらない。……実は年m（殴

容姿：肩まで伸ばした銀髪に、少し厳しめの目付き。背はティアナより少し低い程度。

性格：本人はクールに振る舞おうとしてる。でも実際は結構感情の起伏が激しい。

魔導師ランク：ミッドチルダ空戦B

階級：一等空士

使用デバイス：非人格アームド「アルテミスボウ」。待機形態は三日月を模したペンドント。

バリアジャケット：元々は魔法使いの着るような真っ白いローブ。六課入隊と同時にライトニング仕様に（白いマントに濃い紫色をした半袖の上衣、それとセットのジャンパースカート。手甲などのオプション付き）

とまあ、こんな感じで。今のといいともいなくともいいような役柄の彼女ですが、これでも結構重要な人ですので、生暖かく見ててやって下さい。

それでは、感想などお待ちしております。

新暦80年。ミッドチルダ首都クラナガン、八神邸。スバルを初めとする六課前線メンバーは、休暇を利用してそこで一同に会していた。仕事の関係上、一人一人が会うことはちょこちょこあつたが、こうして全員が揃つことはめったになかった。

「いやー、しかしティアも来ればよかつたんだけどねー」

燐々と照りつける太陽のもと、波間にぷかぷかと浮かびながら、スバルはのんびりした口調でそう言った。

暑い日が続く今日この頃。集まつた皆はひとしきり談笑した後、はやての提案で海でくつろぐことにしていたのだった。

「やつぱり、ティアさんがいないと寂しいですよね……せっかくみんなが集まつたのに」

「まあ、ティアも暇じゃないからしうがないんだけどさ」

隣を泳ぐキャロの残念そうな表情に、スバルは首をすくめてみせる。

ティアナの仕事が忙しいのはいつものことだった。特に最近では名が上がってきたのか、色々な事件に引っ張りだこになっているらしく、今回急に来れなくなつてしまつたのも、緊急の依頼があったせいだと聞く。

(……寂しいってのは勿論あるんだけどね)

スバルが小さく溜め息をついた時、先程から沖に出ていたエリオが、見事なクロールで戻ってきた。

「お帰りー。そつちはどうだった?」

「はい、もう魚の群れが凄く綺麗で……！ キヤロもスバルさんも、絶対見た方がいいですよ！」

キラキラと目を輝かせて語るエリオ。その様子がまるで小さな子供のようで、スバル達は思わず笑ってしまう。

「えっと、あの、僕、何か変なこと言いましたか？」

「うん、背は大きくなつたけど……あ、なんでもないなんでもない」

「ただ、そんなに綺麗なところなら、わたしも見てみたいなつて

「あ、キヤロもそう思つ、なら……」

『もしもーし、三人とも、聞こえてる?』

そんなこんなで遊泳を満喫しているスバル達の脳裏に、なのはからの思念通話が届く。

『なのはさん、どうかしたんですか?』

『うん。はやでちやんがね、西瓜を用意してくれたみたいなの。だから、一旦浜辺に帰つてきてくれる?』

『本当にですか！？　んんん、やつたーー』

西瓜の話を聞くや否や、スバルは物凄いスピードで浜辺に向かって泳ぎ出す。水飛沫を浴び、呆気にとられるキャロとヒロオ。

「……スバルやんつて、時々子供みたいだよね」

「え、あ、あはは……」

しばりくしてヒロオの呟いた言葉に、キャロは内心懶りついのがあつしつむ、一応曖昧に笑つて答えたのだった。

「わあ～！　美味しそ～～！」

浜辺に設喰された大テントの下、大きくて見るからに瑞々しそうな西瓜が六個、でんと机に置かれていた。

「どれもキンキンに冷えとるでー。や、みんな遠慮せんと、じんじん食べてな」

はやでが得意氣な顔でわつわつ。だが、誰も手をついたりとしない。

「？　どないしたん？　みんな食べひんの？」

「せやでやん、分かつてるとこせ野つせび、めずせ切ひなへくわ…」

「…」

「……あ」

まさかのシャマルから指摘を受け、しばりへ呆けるはやで。

畠から採れたまんまの西瓜を「食べて」と出せれども、普通は反応に困るだけである。はやはては笑つて誤魔化しながら、手近にある刃物を探す。が、見つからない。

「なあ、シグナム」

「なんでしょうか、主はやで」

「レヴァンティン、ちよお貸してくれひん?」

この状況で剣（刃物）を貸してくれとは、はやはての意図は火を見るよりも明らかだつた。普段は主の命令に忠実なシグナムも、こればかりは返答に窮してしまつ。

いやあな沈黙がしばし続いた後、おずおずと手を擧げる者が一人。

「あの……わたしが包」とつてきます

「ホンマか? おおきになあ、キヤロ。ええ子には後でサービスや

「は、はい、ありがとウ」わこせわ

はやてこむよこんと礼をしたキヤロは、かわいらしい水着姿のまま、てくてくと八神邸へ歩いていった。

「えーっと、包丁、包丁……あ、あつた

八神邸、台所にて。がさごそと調理器具の類を漁るキャロ。日常的に使うものだけあって、お皿当ての包丁はすぐに見つかった。それを持って浜辺に戻ろうとしたキャロだったが、不意に聞こえてきた人の話し声が、その足をはたと止めた。

『……以上、ミッドチルダ地上本部前からお伝えしました。続いて……』

(一ノース？ テレビが付けっぱなしのかな？)

どうせなら消していくつ。そう思ったキャロは、モニターの設置されていくリビングへ向かった。

(あ、やっぱり)

そしてキャロの思った通り、テレビモニターは無人の部屋でも精力的に仕事をしていた。

モニターを消そうとした彼女の目に、ちょうど流れていたニュースが目に留まる。

『……サンジエルマン特派員のアリスさん、現地の情報はどうですか？』

(サンジエルマン？ それって確か、ティアさんが調査に行つてゐる世界だったような……)

キヤロがそんなことを考へてゐる内に、映像が整然としたスタジオから荒涼とした荒れ地へと移り変わる。

『はい、こちらサンジエルマン特派員のアリスです。つい先ほど入りました情報によりますと、現在確認されている失踪者は、エーリッヒ＝ラインラント執務官、ハルミ＝ラインラント執務官補、そして今回新たに行方不明となつたティアナ＝ランスター執務官の三名で、これに対し本局側は「全力で不明者の捜索に当たる」という旨の発表をするに止まつていますが、依然捜索は難航中で、本局内部からは「現地の状況を鑑みると三名の生存はもはや絶望的」との見方もある』

モニターが消える。思わず取り落とした包丁が、その小さな足に突き刺さりそうだったのだが、気付かない。自らの心配などしているないほど、キヤロは動搖していた。

ゆつくりと胸に手を当てる。まだ心臓が早鐘を打つていて。ランスター執務官。行方不明。捜索は難航。生存は絶望的。そんな言葉達がキヤロの脳裏をぐるぐると回つては、彼女の心を揺さぶつていく。

（どうしよう、どうしよう、ティアさんが行方不明なんて……！
は、早くみんなに伝えないと…）

いてもたつてもいられなくなつたキヤロは、包丁のことなどはすっかり忘れ、この悪夢のような情報を持つて八神邸を飛び出した。

「あ、キャロが戻ってきた！　おーい……って、あれ？」

駆けてくるキャロに手を振るスバル。だが、すぐにその様子がかしいことに気付く。包丁を取りに行っていたはずのキャロは何故か手ぶらで、その表情は今にも泣き出しそうだ。

キャロはテントまでたどり着くと、困惑する一同に向かって、必死の様相で訴える。

「ティアさんが……ティアさんが、大変なんです！　ああ、早くしないと、早くしないとティアさんが……！」

「キャロ、大丈夫。大丈夫だから、まずは深呼吸して落ち着いて」

尋常ではないほど取り乱したキャロを、フロイトが優しく宥める。そうしてようやく落ち着きを取り戻したキャロに、ゆっくりと尋ねる。

「それで、ティアナがどうしたの？」

「は、はい……あの、さつきニュースでティアさんが担当している事件のことを紹介していたんですけど……」

「ティアナの担当している事件……サンジェルマンのロストロロギア調査だね」

ティアナが律儀にも全員に謝罪メールを送っていたので、このことはみんな知っている。キャロは頷くと、思わず震えだしそうにな

るのを堪えながら、端的に「いつ話した」。「そして、そこでティアさんが……失踪、したって」

失踪。その言葉を聞いた瞬間、凍り付くような衝撃がスバル達の間に走った。

「えっと、キャロ……それ、冗談だよね」

スバルは、この悪夢のような情報がキャロの悪い悪戯であることを探り、恐る恐る呟く。だが、その望みはキャロが力なく首を横に振つたことにより霧散した。

「それに……本局の人が、せ、生存は、絶望的、で」

そこまで話して砂上に崩れ落ち、涙を堪えきれずにしゃくりあげるキャロを、フェイトとエリオがそっと抱つてやる。

「もしもし、本局捜査部ですか？ 特別捜査官のハ神です。……ああ、プライベートなんで格好は気にせんといて下さい。それより、サンジエルマンでのロストロギア事件の件なんですが はあ、ではその情報に間違いはないんですね？ ……わかりました」

そしてキャロの話を聞き、いち早く真偽の確認をとつていたはやて。しばらく険しい表情でオペレーターと会話を続けていたが、通信を切斷してすぐ「あかん、これはあかんよ」と、仲間の不安げな眼差しを浴びながら、沈痛な面持ちで呟く。

鉛のような沈黙。キャロのすすり泣く声だけが聞こえる、暑い夏の浜辺。

「……あたし、行つてきます」

凛とした声に、俯いていた顔を上げる。毅然とした決意を秘めたスバルが、そこにいた。

「ティアはいなくなつちゃつただけで、まだもう会えないと決まつたわけじやないんですね。……だつたら、あたしが捜しに行きます。あたしが、ティアを助けてます！」

彼女の力強い言葉に、キャロが涙を拭いて立ち上がる。

「……わたしも、スバルさんと同じ気持ちです。役に立てるかはわからなけれど、ティアさんのために、出来ることをしたいから」

「ティアさんは、僕達の大切な仲間です。六課の時には何度もピンチを救つてもらいました。今度は、僕達がティアさんを助ける番です」

それに続く形でエリオも宣言する。

スバル達の勇ましい様子に、元隊長達は否応にもあの時から長い時が流れたことを感ぜざるを得なかつた。面子は同じでも、中身は一回りも三回りも成長していたのだ。

「……そうか。それでこそあたしらの教え子だ。おめーらがやるつて言つてんだ。もちろん、あたしも出来る限りの手をつくす」

「私も微力ながら手伝おつ。敵を斬ることしか出来ない私でも、役立つことはあるだろうからな」

元副隊長達も、その心意気を汲み取つたのか、協力を申し出る。隊長達は言わずもがなだった。

スバル達は一旦八神邸に戻つて各自が必要な連絡をとつた後、八神特別捜査官とテスラロッサ執務官の協力者という形で、一路サンジェルマンへと向かつたのだった。

(……？、ここは……？)

うつすらと目を開けると、見慣れない石天井がぼやけた視界に映り込んだ。起き上がりつて辺りを見回してみると、どこか見覚えのある光景で。部屋の中央に淡く光を放つ魔導書を見つけて、ティアナはここが何処なのか悟つた。

(……！ ウィーナ遺跡！？)

ティアナは魔導書に駆け寄る。それは相変わらず幻想的な光を湛え、ともすれば魅了されてしまいそうなほどの何かを持つていた。スッと無意識に手を伸ばすティアナ。いけない、と頭が理解した時には、もう魔導書に触れようとしていた。

(……え？)

だが、そのティアナが魔導書に触れるることはなかつた。半透明をした彼女の手は魔導書の表紙を突き抜け、向こう側へ飛び出していたのだ。

一重のショックで、かん高い叫び声を上げて飛び退くティアナ。

慌てて自らの姿を見直すと、薄く透けた産まれたままの自分がそこにはいた。誰もいなことはわかつてはいたものの、反射的に体を隠してしまつ。

(「……これは一体どうなつてるのよー?」)

予想外の事態に面食らつ反面、頭の片隅では、今の状況を冷静に分析している彼女がいた。

まず、半透明という幽霊のよつた見た目からして、ティアナの体は実体を持つていなし可能性が大きい。魔導書を手がすり抜けたことが、その仮説に根拠を与えていた。

次に、この場所について。周囲の景観や魔導書からここがウイーナ遺跡であること間に違ひはなく、ティアナはその最深部に一人でいたことになる。それも、実体をなくした姿で。

(ひょっとして、あたし……死んだの?)

ティアナの最後の記憶は、ヴィータのグラーフアイゼンに意識を刈り取られた所で終わつてゐる。今のティアナの状態が、パンタシアによつて変換された意識体であり、依り代となつていた「向こう」のティアナの体に何かトラブルが起こつてユニゾン(仮)が維持出来なくなり、元の世界に戻された いかにもあり得そうな話ではある。

(まさかね……)

ひきつった笑みを浮かべるティアナ。とりあえず、今は信ずるに足る情報が欲しかつた。既存の知識だけでは、この状況を正確に把握するには不可能に近い。

(まず、観測所に行つてみないと)

ティアナはふわりと浮き上ると、遺跡の天井を通り抜けて外へと飛び出す。その際の奇妙な息の詰まるような感覚に、ディープダイバーとはこんなものかと、妙に納得したりした。

外は地も空も相変わらず砂塵にまみれていて、不毛の土地という言葉が最高に似合っていた。これまた最高に悪い視界の中を、ティアナは観測所を目指して飛んで行つた。

観測所周辺は、多くの人員でごった返していた。本局かららしき調査部隊に物資の補給部隊。武装局員の姿の他、民間のメディアまでいる。観測所周辺には臨時の隊舎まで建てられており、ティアナが知らない間に、ことはかなり大きくなつていていた。

そして、幽霊のような存在とはいえたティアナは裸一貫であり、老若男女入り交じつた人の群れを前にして、当然のことながら羞恥心に襲われる。

(な、なにか着るものは……)

ダメ元で不毛の荒野を見渡す。服とは言わずともせめて何か体を隠すものが欲しかつたのだが、あるのは役に立ちそうもない枯れ木枯れ草ばかり。どうしようかと思案に暮れるティアナだつたが、不思議なことに彼女はいつの間にか六課の隊服を身に纏つていた。

少なからず驚いたものの、今の自分は意識体なのだから、この身に何が起こつても不思議ではない そう無理矢理納得したティアナは、観測所の中へ突入した。

(……やつぱり、あたしの姿は見えないみたいね)

これだけ多くの人が集まっているというのに、ティアナに気付く者は皆無だった。そのことに、一抹の寂しさを覚える。

込み入った廊下を抜けて、所長室へと向かう。情報を集めるのなら、トップの近くにいたほうが何かと便利だろうからだ。

所長室近くまで行くと、人の姿は極端に減った。ソニア所長に状況報告をしにきたらしい少数の者を除いては、ほとんどすれ違うこともない。故にその近辺の廊下は、防音処理を施した部屋以外から話し声が漏れ聞こえるほど静かだった。

所長室前までやってきたティアナは、部屋から聞こえてくるソニア所長の声に、ふと足を止める。

「失踪当時、ランスター執務官は捜索隊の隊長として、安全の確保された遺跡内の捜索隊指揮、及びに単独での高機動行動を主任務に行動していた。我々は彼女を含め、捜索隊から遺跡内の緒情報を探してはいたのだが、どういうわけか彼女との通信が何らかの妨害により切断されてしまつてな。我々は最後まで懸命に通信を試みたが、ついに行方不明と断定せざるを得なくなつてしまつた。それで」

どうやら、誰か部外者と話をしているらしい。少し戸惑つたが、どうせ見えないのでからと、ティアナは思いきつて所長室へ飛び込んだ。

「ヨミの一つも落ちていない床とは対照的に、様々な書類の散らばつた机。それが客人の目に入らないように工夫されて設置された応接用のソファには、三人の人物が座つていた。

「以上がランスター執務官失踪までの事件の推移なのだが、こちらとしても事実関係を追いかけていない節もある。所々説明が至らなかつた箇所もあつただろうが、ついてはどうかご容赦願いたい」

そう言つて深々と頭を下げる、三人の内の一人。ソニア＝リューグエル所長。

「いえ、我々としても所長の情報提供には感謝しています。おかげさまで貴重な証言を得ることが出来ました」

「今は一刻も早い失踪者の救出が求められています。そのような中につての捜査への惜しみ無い協力に、重ねてお礼を申し上げます」

そんなソニア所長に対面して座つているのは、ハ神はやて特別捜査官とフェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官。見慣れたこの二人の登場に、ティアナはしばし言葉を失つた。ティアナの記憶では、二人ともまだまだ休暇を満喫しているはずだったからだ。それとも、知らぬ間に大分時が経つてしまつたのか。

困惑するティアナを余所に、三人は話を進めていく。

「所長、一つお願いをしてよろしいでしょうか？」はやでが切り出した。

「お願ひ？　ああ、長期滞在用の宿泊設備の説明がまだだつたな。それならば……」

「いいえ、違います。我々のウイーナ遭跡突入許可を頂きたいのです」

それとなく話を逸らさうとしたソニアに、はやでが鋭く待つたを掛ける。交渉に関しては、付け入る隙を与えないはやての方が一枚上手だった。

「……まあ、そう急がなくてもよいだろう。貴女方はまだこの世界に到着したばかり。ご覧の通り、このサンジエルマンは厳しい世界なのでな。今後の活動の為にも、しばし体を休ませてはいかがかな？」

「所長のお気遣いはとてもありがたいのですが、我々は早急に不明者の救出を行わなければならないのです。リュークエル一佐、貴女ほどの立場の人間なら、四年前、JUS事件の際に成果を挙げた実験部隊『機動六課』のこと……ご存知のはずですよね？」

尚もやんわりと拒否をするソニアに、はやてが言葉で詰め寄る。彼女が言外に何を言つているのかを悟り、思わずソニアははやての視線から目を逸らしてしまった。

「……ランスター執務官は、かつて貴女の設立した部隊の一員だつたか。なるほど、私も部下の命を預かる身。ハ神特搜の主張は十二分に理解出来る。理解は出来るが……すまない、突入許可は出せないのだ」

「リュークエル所長、貴女はランスター執務官の失踪以後、本局の正式な調査部隊以外には、ただの一度も遺跡の捜索を許可していませんよね。本来なら捜査の先頭に立つべき『サンジエルマン史跡警備隊』も、拠点を提供するだけで全く動きがありません。……何か理由でも？」

「…………」

フヨイトの鋭い指摘が飛ぶ。ソニアは押し黙つたまま何も答えない。

「失礼します」と、その時、沈黙を破り新たな人物が所長室へと

訪れた。

「おお、Hミール君。どうした、何か進展でもあつたのか？」

現れたのは、ティアナの出迎えにも来ていた青年、Hミールだつた。手には黒つぽい小箱を持つており、ソニアはこれ幸いとばかりに、話題を彼に移した。

「ええ、ようやく失踪者の手がかりとなるものが発見されました。……所長、これを」

少し興奮した様子のHミールは、手にしていた小箱を差し出した。ソニアが開けてみると、中には三つの小さな物体が入つていた。

「これは……！？」

「三つとも本局調査部隊が遺跡内の袋小路で見つけたものらしいです」

「つづむ……八神特捜、ハラオウン執務官、貴女方もこれを見てほしい。私からのせめてもの詫びだ。このくらいの情報開示くらいは喜んでしよう」

はやて達とともに、ティアナも箱の中を覗き込む。そして「それ」を見た瞬間、あつと小さく叫び声を上げた。

箱の中の三つの物体。小さなアクセサリーのようなそれは、紛れもなくデバイスだつた。そしてその内の一つは、ティアナの相棒に他ならなかつたのだ。

「そんな……これ、ティアナの……」

「クロスミラージュ……」

待機状態のクロスミラージュは、見たところどうにも損傷は見当たらない。他の二つのデバイスについても同様だった。

（……あれ？）

デバイス達を見ていて、ティアナはふと違和感に気がついた。

（何かおかしいよつな……）

確かに何かがおかしいのだけど、具体的に何がおかしいのかはわからない。ティアナがそんなもどかしさに頭を悩ませていると、不意に周囲が水を打ったかのように無音になつた。

ティアナが顔を上げると、すでに変化が始まっていた。景色は静止し、どんどん小さくなる。視界は急速にズームアウトし、所長室の様子が一枚の絵のように見える。絵の額縁はどこまでも暗い黒で、見ていると吸い込まれそうなほど深い。ティアナが己の状況を理解するより先に、世界は完全に暗転した。そして

物凄い勢いで起き上がるティアナ。掛けられていた薄いタオルケットが宙を舞い、ティアナの背を嫌な汗が伝う。

ティアナの目の前に広がっていた光景は、間違いなく機動六課の自室のそれだった。

「夢、だったの……？」

呆然として咳くティアナ。夢にしては出来すぎていたけれど、確かに夢のように荒唐無稽でもあった気がする。どちらにせよ、自分は死んでいなかつたらしい。ただそのことに堵するティアナ。

「気がついたかしら？」

急に声をかけられ、ティアナはハッとした。見れば、椅子に座った銀髪の少女の姿が。

「ルナ、あたしは……」

「ヴィータ副隊長に殴打されて昏倒。流石に死にはしなかったけれど、副隊長は高町教導官に怒られてたわね。やり過ぎだつて。ちなみに、結果は私達の負け」

「そう……」

ティアナには、隊長戦をしたのが遙か昔のことのように思えた。あんなに必死になつた戦いも、今考えればどうしてそこまで熱くなつてしまつたのか理解が出来ない。結局のところ、自分は他所者に過ぎないのに。

「ねえ、ルナ」ティアナがぽつりと言つた。

「何よ？」

「あたし、帰らなきゃ」

帰らなきゃ。ティアナの言葉に、ルナはじつと彼女の目を見つめる。

「あたし、ここが懐かしくて、つい考えるのを後回しにしてたんだけどね……やっぱり、ここはあたしのいるべき場所じゃない。あたしの居場所は、あたしの生まれた世界しかないんだって」

「…………」

「だからルナ、教えてくれる？ あたしが、あたしを待つてくれる人達のいる世界に帰る方法を」

ルナの目を見つめ返すティアナ。その迷いのない瞳が、彼女の真剣さを物語つていた。

だがルナはそんなティアナの決意に、困ったような表情を浮かべて視線を背ける。

「いいわよ、って言いたいところなんだけどね……ティアナ、覚悟して聞いて頂戴」

そう言つてルナは少し迷つた後、ティアナに向けて言い放つ。

「私達は、帰れない」

ミッドチルダの空は、深い夜の闇に包まれようとしていた。

夢か現か（後書き）

どうも、風刻です。相変わらず亀更新で申し訳ござりませんm(—_-)m

今回は一方その頃的なノリで元の世界のスバル達の話です。ご覧の通り、キャラの多さに描写がついていません。ごめんりイン&アギト&ザファイーラ……この三人はまだ一度も本編に出せていません。好きなキャラなのにo_o

ともあれ、根気よくここまで読んで下さった皆様、ありがとうございます。誤字などがありましたら、感想欄で教えて下さればありがたいです。

それでは、感想などお待ちしております。

「はい、今日の訓練はこれでおしまい。皆、お疲れさま」

隊長戦の日から一週間と少し過ぎた。日に日に厳しくなつていいく訓練に、スバル達はへとへとになつていてるようだつた。

談笑しながら隊舎へと戻つていくスバル達。だがそんな中、ティアナは他の皆とは距離を置いていた。時折するため息が、またに悩める年頃の少女、といつた情景を演出している。

（……ティアナ、まだ元気無さそう。ヴィータちゃんと相打ちになつたの、そんなに気にしてるのかな？）

普通ならば色恋沙汰の方面に邪推してもよいものだが、流石は戦技教導官。加えて本人がそういうものに弱いため、どうしても硬い方向に考えてしまうのであつた。

（やつぱり、止めれば良かつたかな……でも、そんなことしてもティアナは納得しなかつたらしい……）

ヴィータ曰く「予想以上にティアナが強かつたので、つい本気になつてしまつた」らしい。本気のヴィータと相打ちになつただけでも十分凄いのだが、ティアナにはその自覚が無いようだつた。

（うーん、そろそろちよつといいに頃合いだし、明日は眞に気分転換でもしてもらおうかな。ティアナも少しは元気出してくれるだろうし）

なのはは明日の訓練のプランを立てながら、訓練場でいつまでも一人思案に耽っていたのだった。

と、そんな風にしてなのはの悩みの種となつていてるティアナであつたが、当の本人は他人が及びもつかない理由で憂鬱気味となつていた。

周りでスバル達が笑いながら話をしている時も、出来るだけ関わらずに黙々と歩き続ける。彼女の頭を占めているのは、ルナに言われた言葉。気づけば、ティアナはあの日のやり取りを思い返していた。

「私達は、帰れない」

ルナがそう言った瞬間、ティアナの時間が凍りついた。絶望した様子のティアナを見て、流石に焦ったのか、ルナは慌てて言い繕つ。

「あ、勿論現状では、つてだけで、帰る方法が無いってわけじゃないよ」

「……どうこうこと?」訝しむティアナ。

「私達がどうやってこの世界にやつて来たか、覚えてる?」

ティアナは目を瞑り、運命の瞬間を脳裏に再演する。

ルナとの戦い。そして、聞こえてきた耳慣れない合成音声。続くまばゆい光。次の瞬間には医務室のベッドに横になっていた。

「当たり前じゃない。あの魔導書、パンタシアが急に光って、それで……」「

「そう。それこそが、私達が元の世界に戻るための鍵」

「つまり、またパンタシアを使えば帰れるってこと?」

無言で頷くルナ。要は、この世界のサンジュエルマンまで行つて、再びパンタシアを起動すればそれで済むと「う」とうらしい。ティアナは俄然希望が湧いてきた。

だが、そんなティアナの楽観的思考を、ルナが冷めた言葉で突き放す。

「けど、現実ははそそう単純にはいかない。もしそんな簡単に帰れるなら、私はこの世界に一年も留まつていったりはしないわよ」

「……そういえば、あなたはあたしより一年余分にこの世界にいるんだつたわね」

「そうじつこと。まあ、私がなんで一年も立ち往生してたかというと……信じられないかもしだいけど、この世界にはそもそもパンタシアがあつた次元世界、サンジュエルマンが存在しないのよ」

「え……」

「大規模次元震で消滅したか、元々そんな次元世界は存在していないのか……いずれにせよ、私達はそのおかげで帰れなくなっちゃつてるの」

ティアナの抱いていた希望的観測は、こうしていとも簡単に手折られてしまつた。パンタシアのある世界が存在しないなら、それはつまり「帰れない」と同義であつた。

「でもね」

ティアナの落胆した反応を見越してか、悪戯っぽい笑みを浮かべるルナ。

「パンタシアが転移させる世界には、必ずパンタシアが存在する。つまり、絶対に一方通行にはならない。……何が言いたいか、わかる?」

「……サンジュルマンがなくとも、この世界にはパンタシアが存在する、ってわけね」

「その通り。そして私の一年間の調査の結果、その在処はシリミッドチルダのどこかだつてことがわかつてゐる」

きつぱりと言い切つて見せるルナ。この結論に至るまでさんざん回り道をしてきたが、幾度も上げて落とされた結果、希望はまだ残つてゐることがわかつた。

「なら話は早いじゃない。是が非でも探し出して、ひとつと帰るまではよ」

「飲み込みが早いのね。今まで私は一人で効率が悪かつたけれど、貴女が協力してくれるなら心強いわ」

ニヤリと笑うルナ。ここに、ティアナ達の当面の目標は定まったのだった。

（是が非でも探し出す、なーんて言つちやつたけど、現実はそんなに甘くないのよね……）

あの日から一週間以上が過ぎたが、未だに有用な情報は上がっていない。忙しい訓練の合間にちょこちょこ調べてはいたものの、腰を据えてやるには到底時間が足りなかつた。

一時期、六課退職を考えたこともあつたが、どう考へても生活に困るだろうし、なのは達相手にそんなこと言い出せるはずもなかつた。そもそも、ティアナ自身がそれを望んでいない。

（どうせスバルは納得しないだろうし、ね）

田の前を歩く親友の姿を見ながら、ティアナは苦笑する。恐らく泣いて引き止めるであろう彼女の姿を想像すれば、ティアナが押しきられることなど容易く予想がついた。

そうこうしている内に、一行はシャワー室へ。エリオが急ぎ足で男性用の方へ消えると、少し残念そうなキャロを引きずつて汗と疲れを洗い流す。

」のシャワータイム、少しでもパンタシアについて調べたいティアナは、後ろ髪引かれながらも早めに上がるこことしてていたのだが、どうやら彼女の協力者はそこまで熱心ではないようだ。

「ねえねえ、ルナルナ」

「どうしたの、スバル」

「あたし、今氣付いたんだけど」

「ええ」

「あたしつて、まだルナの胸、触ったことないんだよね」

「……先に言つてしまふけど、私はスバルを満足させられるほど大きくはないわよ」

「じゃ、あたしがルナの成長の手助けを」

「却下。余計なお世話」

「えー、いーじゃんいーじゃん」

「ダメ。そんなに触りたいなら、触り甲斐のあるティアナのにしないさい」

「だつてティアのはもうマスターしたじ」

とまあ、こんな調子で壁越しに聞こえてくる氣の抜けた桃色の会話に、ティアナの精神はグツグツと煮えたぎついていた。

そつとは知らず、話題をティアナの胸にすっかりシフトさせたスバル達。一人より先に出て着替えたティアナは、浴室の入り口で仁王立ち。一人を待ち構える。その凄さとったら、続いて出てきたキヤロが思わず小さな悲鳴を上げるほどだった。

「うーん、すつきりした~」

「私はもう少ししゃべりしたかったけどね」

やがて、いかにもさっぱりした様子のスバル達が現れた。そして、目の据わったティアナを見て表情を凍らせる。

「あ……えっと、ティア?」

「……スバル、貴女またティアナを怒らせるようなことしたの?」

「し、してないよぉ! ルナこそ何かやつたんじゃないのー?」

「私が? バカ言わないで頂戴。どうして私がティアナを怒らせなきゃいけないのよ」

「そんなこと言つたらあたしだって……!」

裸のまま責任の擦り合いを始めるスバルとルナ。ティアナは一度深呼吸して、もう一度息を大きく吸い込むと、

「つるさあああいっ!!~」

「「~.~.~」

ティアナの一喝に、ピタリと口論を止めるスバル達。

「あんた達……人をダシにして勝手に盛り上がるなんて、いい根性してるじゃない」

「えっと、それはルナが……」

「な、何よ、責任転嫁？」

「事実だもん！」

「だからひつひつて言つてんでしょう……！」

懲りずに責任逃れを始めたスバルとルナに、ティアナはピシャリと言葉の砲撃を浴びせる。再び沈黙する二人。

「つたくもう、スバルはいつものことだからともかく、何でルナまで悪乗りしてるのでよ」

「あら、だつて少しばらラックスしなきや、この後が続かないもの

もう少し真面目にパンタシア探しをしてほしい、との含みを持たせたティアナだったが、それを知つてか知らずか、当たり障りのない答えでお茶を濁すルナ。

一方のスバルは、思いがけず叱られてしまったことに納得がいかない様子。ルナをジト目で見ると、不満たらたらに文句を言い出した。

「ルナが悪いんだよ。素直に胸を触らせてくればいいのに、ティアの話にすり替えるから……」

「残念だけど、私はそんなに安っぽくないの」

「ねえ、それってあたしが安っぽい女だつて言つてる?」

ドスの効いたティアナの台詞に、ルナはビクッと体をすくませる。

「そんな、考え過ぎよ考え過ぎ。深い意味は無いわ。……多分」

「多分つて、あんたねえ」

「一言余計だつた?」

「確信犯じゃない!」

今にもバイオレンスな惨劇が始まりそうな雰囲気の中、何とか戦火の外に逃れたスバルは、目をぱちくりさせて一人を見ていたが、

「……ティア、元に戻つたよね」

唐突に発せられた言葉。ティアナとルナは同時にスバルを見る。

「元に戻つたつて……」

「うん。この前からさ、ティア、ルナによそよそしかつたよね。そりや、見ず知らずの他人、とまではいかないけど」

「……」

急速に熱が冷め、少し俯くティアナ。ルナには友人らしくそれな

りに仲良く接してきたつもりだったが、やはり、年来の親友だったスバルからしてみれば、どこか遠慮がちに映ってしまったのだろう。

「でも」スバルが続ける。「やつと、前みたいに戻った」

はにかむスバル。ルナはと言えば、何やら照れ臭そうにやつぽを向いている。

（……まさか、二人ともこれが目的で？）

思わず勘織つてしまつティアアナ。田を合わせようとしたルナをジーフと見つめると、少し顔を赤くした彼女は妙に素早く着替えた。

「あれつ、ルナ、ひょつとして照れてる？」

「さあ？」

「さあ、って……やつぱり照れて」

言いかけたスバルの頭に、洗顔クリームの容器が飛来、直撃する。無言でルナに抗議の眼差しを送るスバル。涼しい顔で受け流すルナ。

「……どうでもいいけど、スバル、早く着替えないと食事に遅れるわよ」

「あー」

ティアナがそう忠告してやると、ようやくスバルも着替えを始めた。そんなこんなで三人揃つて更衣室を出た時には、エリオとキヤ

口はもう心底待ち伏せていたようで、ティアナ達は一人に謝りつつ、全員で食堂へと向かったのだった。

「ええ、ですから……何度も言つりますが、私の部隊にやましい人間はおりません。それから、金輪際そちらの世話になることもないでしょ。では」

機動六課部隊長室にて。はやはては普段の彼女に似合わない、やや乱暴な調子で通信を切斷した。

「全く、なんやつひゅうねん」

「はやてちゃん、どうかしたですか？『機嫌ななめ』に見えるですよね？」

そんなはやてを気遣う、リインフォース？。はやはては心配そうに自分を見つめるリインに、優しく微笑みかける。

「大丈夫、中央情報部つちゅう部署の連中が嫌に高圧的だつたさかい、ちょおカツとなつてしまつただけや。心配してくれてありがとうな、リイン」

「はやてちゃんが怒るなんて珍しいです」

「仮の顔も二度まで、や」

はやはわざといし不機嫌でそつ言つた。

先程の通信は、管理局中央情報部を名乗る部署からのものだった。なんでも、機動六課に経験がはつきりしない不振人物が紛れている可能性があるため調査させること。令状すら無い非正規の要請だったため、無論はやははこれを一蹴したのだった。

（そもそも、ほんまに局の部署かも怪しいしなあ。大方、できの悪い局員の悪戯か何かや）

はやははしき結論付けると、机の上の書類等を片付けて席を立つ。

「リイン、お腹空いてるやん？ 私はこれから夕食なんやけビ、一緒にいこか？」

「はい、お供をせてもうひとつです！」

リインは嬉しそうに返事を返すと、はやはの肩の上に収まった。はやはは先程の通信のことと記憶の彼方に追いやると、わたくはと部屋を後にしたのだった。

時空管理局。幾多の正義と闇とで彩られた、次元の海に浮かぶ法の船。表の顔である武装局員や執務官、捜査官達が華々しく活躍す

る陰で、巨大な組織を支える為の汚れ役を一手に引き受けた者達がいる。

時空管理局中央情報部。その存在自体は公式に認められてはいるものの、彼らが己の仕事を公表したがらないと管理局自体がこの部署の存在を大っぴらに口にしたがらないのと、実際にその名を知る者は少ない。予算審議の場面でさえ話題に上ることもないのだから、活動内容となれば尚更だった。

実態不明の中央情報部であるが、本局の一角、一般職員の立ち入りが厳しく制限されているその場所に、彼らの居場所はあった。

「……そうか。例の部隊は自主的な協力を拒んだか」

低い男の声がした。

高級そうな肘掛け椅子を初めとする、質の良い調度品で飾られた広い部屋は、一見すると小洒落た屋敷の一室のように見える。だが、薄暗いシャンデリアに照らされたこの一室こそが、紛れもなく管理局中央情報部の本丸であった。

そんな部屋の奥、退屈そうに肘掛け椅子に腰かけている男が一人。

「ソニア、おいで」

彼が手を叩くと、暗がりから一人の少女が姿を現した。金髪をした彼女は、無言で男の前に跪く。

「いい子だね、ソニア。ご褒美として、君には面白い仕事を与えよ

「う

少女は顔を上げる。その瞳はどこまでも暗く濁つており、まるで意思というものが感じられなかつた。

「ターゲットは年代物のアンティークドール。確保に必要なデータは君のデバイスに送つておくよ。さあ、どうか私の為に頑張つてくれ」

「……御意」

従順な少女は、再び暗闇へと消える。

「期待しているよ、私の可愛いお人形」

後に残された男は、口の端に不気味な笑みを浮かべながら、小さくそう呟いたのだった。

小康（後書き）

今回は少し短か日です。ここまでオリジナルな話をしてきましたが、次回は原作の流れに戻つて「機動六課のある休日」に入りますので（言つても原作とは展開が違つてくる予定ですが……）その前準備的なつもりです。

ここからようやく物語が本格的に進行していきますので、どうかお付き合いをお願いします。

それでは、感想等お待ちしております。

新人達のある休日（前編）（前書き）

累計PV100000 ユニーク2000人突破しました！
拙作を応援してくださっている方に感謝感謝です！

新人達のある休日（前編）

機動六課の朝は早い。特に新人フォワード達の早朝訓練は、彼らの育成を担当している戦技教導官が厳しいこともあり、かなりハードなものだった。それに付いていける新人達も大したものだが、おかげで実力はめきめきと伸びていた。

最早六課名物となつている高町式教導だったが、何故か今日は勝手が違つた。

「全員集合ーー！」

なのはの掛け声で、各々が彼女の前に整列する。なのははその様子を見て満足そうに頷き、微笑んだ。

「みんな、朝の訓練お疲れ様。実は今日の訓練、みんなの訓練が次のステップに進めるかどうかのテストも兼ねてたんだけど……フェイティちゃん、ヴィータちゃん、どうかな？」

テスト。その単語を聞いたフォワード陣の表情が強張る。

「うん、合格」

「文句なしとは言えねーが、まあ、合格だな」

だが、返ってきたのは予想以上に肯定的な評価だった。一転して顔を輝かせるスバル達。だが、ティアナだけはこのイベントが素直に喜べないものだということを知つていた。

（……今日はルーテシア達と交戦、か）

思わずため息をついてしまつティアナ。この時点では敵同士ではいえ、元の世界で親しくなつてゐる相手と命懸けで戦つのは、やはり気が引けた。

おまけにこの事件が過ぎたとなれば、後は公開意見陳述会まで一直線。そうなればノーヴェやチンク、ウェンディー達とも戦わなければならぬ。更生後の彼女達を知つてゐるがゆえ、ティアナにしてみればやりにくいことこの上ない。よく晴れた空とは対照的に、ティアナの気持ちは滅入るばかりであつた。

「ティアナ」

「ー、は、はー！」

と、そんな風に思案に耽つてゐると、なのはが急に呼び掛けてきた。

「大丈夫？ なんだか最近、元気ないみたいだけど……」

「あ、いえ、大丈夫です。何でもありません」

「ならいいんだけどね。でも、もし何か気になることがあつたら、遠慮なく相談に来てほしいな」

心なしか少し寂しそうに見えるなのは、ティアナは心の中で謝りつつ、曖昧に微笑んでみせた。

「それで、今日はみんなのデバイスのセカンドモードを開放、調整しなくちゃいけないし、午前と午後の訓練は無し」

「え、午前も休みなんですか？」

「本当は午前も訓練に回したかったんだけどね。ルナのデバイスが調整に時間がかかるみたいで」

思わず口をついて出たティアナの質問に、なのはは少し困った顔で答える。ルナの方に目をやれば、眩しい銀色の大弓が目についた。

「非人格のアーマードなのに時間がかかるって……」

「な、何よ。これは私専用に作つてある特注品だからなの。文句ある？」

「特注品って、あたし達のデバイスはみんなそつだと想つナビ」

「ぐ……や、休みが増えたんだから別にいいじゃない！」

「はいはい、二人ともそこまで。とにかく今日のお休みは、普段訓練を頑張ってるみんなへの、わたしからのちょっとしたプレゼント、くらこに思つてくれるといいな」

「プレゼントの使い道なんだけど、緊急時に間に合つ範囲で、街に出て気分転換なんてどうかな？ なかなかこうこう時間は取れないし、悪い話じやないと想うよ」

なのはとフロイトの言葉に沸き立つスバル達。ティアナはのんきな彼女達に苦笑しつつ、今日一日の計画を考える。

午後一杯はヴィヴィオやレリック関係で手一杯となってしまうので、パンタシア探しに使えるのは、必然的に午前中だけとなる。とても街で遊ぶ暇などない、のだが。

「ティアツ！ ルナツ！ あたし、アイス食べたい！ ほら、あの
お店の……」

と、スバルは遊ぶ気満々。とてもではないが行かないなどとは言
えなかつた。

「あ、それいいわね。実は私も行つてみたいところがあるんだけど
……」

（……はあ）

加えてルナも乗り気である。結局この一人に押しきられる形で、
ティアナもクラナガン巡りへ連れ出されことになつたのだった。

「それじゃあなたのはわん、行つてきまーす！」

「フェイトさん、僕達もそろそろ出掛けます」

デバイスの調整が終わり、それぞれが支度を済ませ、いよいよ六
課の外へと繰り出すとき。見送りに来た隊長一人の反応は対照的で、
にこやかな笑顔のなのはに比べ、フェイトは終始心配そうな表情を
崩さない。

「暗くならない内に帰つてきてね。あと、あんまり人気のないところには行つちゃダメだよ。それから、何か困ったことがあつたらちゃんと人に訊くんだよ？　あ、でも知らない人に付いていつちゃダメだからね？」

「だ、大丈夫ですよ、フュイトさん。僕達も、もう子供じゃないんですし」

（いや、あんたら十分子供でしょうが）

心の中でひそかにツッコミを入れるティアナ。

「でも……あ、そうだ。ルナ」

「はい？」

まだ納得しきれない様子のフュイトは、何を思ったか唐突にルナを指名する。

「悪いんだけど、エリオ達の同行を頼まれてくれない？　同じライティングだし、親睦を深めるいい機会だと思つんだけど……だめ？」

「私は構いませんが……エリオ達が気分を害するのでは？　折角の二人水入らずのデートを、私が邪魔してしまつのは如何なものかと」

ちらりとライトニングの一人の方を見てみれば、赤面して俯くエリオと純粋に嬉しそうなキャロルが、絶妙な癒しオーラを醸し出している。

「あ、そ、そつか。……」めんね、エリオ、キャロ。一人の気持ち、考えてなかつた

「いえ、僕は別に、ルナさんが付いてくれるなら安心ですし……キャロも平氣だよね？」

「うん。わたし、クラナガンってよく知らないから、もし出来るならルナさんに案内を頼めるといになつて」

エリオ達の肯定的な返事に、ルナはティアナ達の方を見る。その意図を察したティアナは、ひらひらと軽く手を振り、

「一緒に行つてやんなさいよ。どうせあたし達のバイクは一人乗りだし、ちゅうどいいわ」

「んんー、何だかお姉ちゃんつて感じでいいじゃん！『ルナ姉』、ファイトッ！」

ティアナに続けて、スバルもそう離し立てる。ルナは恥ずかしそうに苦笑いすると、エリオ達の方に向き直る。

「わかつたわ。私でいいなー一緒にさせてもらおうかしら」

「本當ですか！？ ありがとー！」わこますー！」

「ルナさん、今日はよろしくお願ひしますー！」

ルナに向かつて、非常に模範的な敬礼をするエリオとキャロ。その波乱に満ちた来歴ゆえか、一人ともどこか子供らしくない。

「ルナ、私のわがままなお願い、引き受けてくれてありがとうございます」

「隊長の頼みですから。それに普段から、個人的にもエリオやキャロともっと良好な関係を築けたら、と思つていましたし」

フロイトの礼に、素つ氣なく答えるルナ。

「それじゃあみんな、あんまり羽田を外さない程度に休田を楽しんできでね」

「はい、なのはさん。スバル、行くわよ

「オッケー！ レッツ、ゴー！」

なのはは送り出され、まずティアーナ達がバイクで走り出す。低速で敷地内を走行しつつ、ティアーナはちらりとルナを一瞥し、

『午後ちょっとした事件が起こるかもしれないけど、慌てないで行動して』

そう念話で言い残すと、ティアーナ達の乗ったバイクは颯爽と道に向ひへと消えていった。

「じゃあ、私達も行きましょうか

「フロイトさん、行つてきまーす！」

「お土産買つてきまーす！」

「三人とも、ケガしないようにね。ルナ、エリオとキャロの」と、

頼んだよ

続いてエリオ達も出発する。なのはとフェイトは手を振りながら、微笑ましそうに三人を見送ったのだった。

「乾杯」

手にしたアイスクリームを触れ合わせ、一人の少女はクスリと笑つた。

ミッドーの大都市、首都クラナガン。管理局地上本部を初めとする政治の中核部であり、周辺管理世界を総括する経済の中心地でもある。流行や文化の発信地もここであり、ミッドやその他の管理世界の若者はこぞってクラナガンに住みたがる。ティアナ達が訪れたのは、そういう街だった。

「うーん、こいやつて遊ぶのも久しぶりだよねー。訓練校以来だつけ?」

「そうね。陸士部隊にいた時はまとまった時間が取れなかつたし

今、ティアナ達はスバルたつての希望により、クラナガンの所謂「評判の店」巡りの真っ最中だった。一人の（といつても主にスバルの）手には最近流行りの食べ物類の入った袋がいくつも握られて

おり、その顔は幸せそうに綻んでいる。

「ねえねえティア、お昼はどいで食べる?」

「あんた、それだけ買つておいてまだ食べる気なの?」

「だつて食べたいんだもん」

ティアナは呆れ半分、羨ましさ半分でため息をつく。健康と体型に気を遣つているティアナにとつて、いくら食べようが太らないスバルはちょっとした妬みの対象であつた。

とはいへ、この世界のティアナはまだまだ成長期真っ只中。昼過ぎともなると、流石にお腹が空いてきた。結局ティアナはデバイスから地図を呼び出すと、スバルと一緒に良さそうな店を探すことに。

「ん?」

一人が地図とにらめっこしていると、デバイスに通信が入る。ライトニング5ことルナからのものだった。

『ハロー、スターズのお一人さん』

「あれー、ルナじゃん。どうしたの?」

『ちびっこカップルとその付添人からランチのお誘いよ。まだ食べてないなら一緒にどう?』

『いえ、あのルナさん、別に僕達はカップルじゃあ……』

『ティアさん、スバルさん、シャーリーさんがオススメしてたお店

ですから、きっと美味しいと思います。よければ一緒にどうですか
?』

ルナ達の誘いに、ティアナとスバルは顔を見合せる。

「ティア」

「決まりね。ルナ、その提案、乗らせてもらわ」

『了解。で、場所なんだけど、クラナガン駅前のホテル カサブランカ 120階ね。一応、アクセス情報を送つておくから参考にして頂戴』

「わかった、ありがと。それじゃあまた後で

「じゃあねー」

通信が切れる。それからまもなく、地図に目的の場所が標された。

「早く行こうよ。あたしもうお腹ペコペコー。」

「両手一杯に食べ物持ちながら言つ台詞じゃないわね、それ

軽口を叩きつつ、二人は地図上に表示されたルートに従つて道を急ぐ。幸い、ティアナ達がいた場所が駅からそれほど離れていなかつたため、比較的早く到着することができた。

途切れることなく往来する人々と、天を突くようこそびえる高層ビル群。大都市のテンプレートともいえる光景を見下ろしながら、ガラス張りのエレベーターで上へ上へと昇るティアナ達。

そうして田舎の階までやつて来た一人を、待つていたルナが出迎えた。

「結構早かったのね。ヒリオとキャロはもう席を取つて待つてゐるわよ」

「そり。悪いわね、待たせちゃつて。そつちはビリ～、休日、楽しんだる?」

「私はボチボチね。もつとも、ちびっこ達は充実してゐみたいだけだ」

ひょいと差し出された紙切れ。見てみれば、そこには何時に映画、ビリビリで散歩、といった綿密な行動計画が書かれていた。

「……ああ、シャーリーさんの」

「テートの予定表、なのかな?」

思わず苦笑いしてしまつティアナとスバル。ビリヤリの店のこともここに記されていたらしい。

さて、三人が赤いカーペットの敷かれた廊下の先に進むと、そこは洒落たレストランとなつていた。昼時のためか、結構な数の客がいる。そんな中、我等がちびっこカップルは窓際にある丁度五人掛けの席に座つていた。

「ティアナさん、スバルさん、いらっしゃいですー」

「『めーん、待たせちゃつた?』

「いえ、僕達も今着いたばかりですから」

ティアナ達も残りの椅子に腰掛ける。そして注文を終えるとすぐ美味しそうな料理が続々と運ばれてきた。

「んんー、綺麗な景色に美味しい食べ物。最高だねー。シャーリーさんも中々やるじゅんー！」

「やうねえ。店の雰囲気の割には値段も良心的だし」

適当に感想を述べつつ皿の眼前的料理を消費していく。景色の良さと相まって、中々優雅なランチタイムである。

「…………」

ふと、ティアナはルナが食事もせず、じっと窓の外を注視していることに気がついた。初めはその景色に見とれているのかと思ったが、どうも違うではないらしい。心なしか、その皿には微かな憂いが湛えられているように見える。

「…………ルナ？」

「ーー」声をかけられ、ハツと我に返るルナ。

「箸が進んではないみたいね。どうかした？」

「別に何でもないわよ。ただちょっと懐かしくて、ね

「懐かしい？ ルナさん、故郷のことでも思い出してくださいたんですか？」

ルナの言葉を聞き、キャロがそう尋ねる。追放された身ゆえか、そいつた話には殊更敏感らしい。

「郷愁つてやつよ。本当に遠い所まで来ちやつた、つてね」

「やういえば、ルナのことってあんまり知らないよね、あたし達。どじ出身で、家族はどじしてるの、とか」

「僕も少し興味があります。……あ、話したくないのなら無理して話す必要はありませんけど」

「スバルとエリオまで乗ってきた。『聞いて面白いものでもないわよ』ルナはそう言って首をすくめる。

「知りたいなあ……ダメ？」

「ダメじやないけど……ただの田舎出身の小娘の上京話、そんなに聞きたい？」

（ルナつて田舎の人だつたんだ）

意外。ティアナの抱いた素朴な感想である。他のメンバーも概ね同じような感想だったようで、そのままやいのやいのと盛り上がるスバル達。

一方で、ティアナはその様子を遠巻きに眺めていた。ルナの「懐かしい」とは、どれほどの意味を持つのか。彼女と同じ境遇にあるからこそ、安易な気持ちで盛り上がる気分にはなれなかつた。

（……ん？）

一人食べることに集中しようとしたティアナの目に、一人の少女の姿が留まつた。こちらに歩いてくる彼女に、ティアナはどこかで見覚えのあるような気がして首を傾げる。

その少女はティアナ達のテーブルを通りすぎると、ちらりとこちらを一瞥した。交錯する視線。思わず目を見開いてしまう。

「リュークエルー佐……？」

ぱつりと呟いたその言葉は、少女に届くことはなかつた。ティアナの記憶している姿よりも多少幼い様子の彼女は、そのまま足早に歩き去ると店の外へと消えていった。

幸いスバル達はまだ話に夢中で、ティアナの不審な挙動には気付いていない。ホッと胸を撫で下ろすティアナ。

（そつか……ここは所詮パラレルワールド。あれはあたしの知つてる彼女じゃない）

そう言い聞かせ、ティアナは仲間の輪の内に戻る。こちらで六課メンバー以外の知り合いに会うのは初めてのことで、それだけにこの一瞬の邂逅で無性に虚しくなつてしまつた。もしかしたら、「向こう」の世界から助けに来てくれたのかもしれない。心のどこかに、そう期待してしまつた自分がいたのだ。

結局、ティアナは心にしこりを残したまま、仲間達との余食を終えた。曲がりなりにも残つていた休日を楽しむ余裕は、見る影もなく萎んでしまつていたのだった。

クラナガン中に張り巡らされた地下水道に、重いものが引きずられる音が響く。普段は人の立ち入ることのない陰鬱な空間を、音の主はボロボロの衣服を纏い、傷だらけの体で当てもなく歩き続けていた。足に繋がれた鎖と二つのケースが、少女の特異性を物語つていた。

「ママ……助けて、ママ……」

力なく漏れる言葉は誰に届く訳でもなく、闇の中に僅く溶け、消える。流れる水音と少女がケースを引くノイズだけが、弱々しい声など初めから無かったかのような態度で、ただ淡々と鳴り続いた。

ケースが一つ、鎖から逃れて水面に落ちる。単調なノイズの中の不協和音。少女は気にも留めずに歩み続ける。

平和な時の終わりは、もうすぐそこまで近付いていた。

新人達のある休日（前編）（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。受験生なので、どうしても時間が……

とまあ作者の身の上話は置いておいて、今回はティアナを始めとするフォワード陣の休日です。タイトルを「機動六課の～」にしなかつたのは、レジアスのおっちゃんの演説シーンとかを丸々カットして、文字通りフォワード陣の描写しかしていなかっためです。そして次回はガジェットやルーテシア、アギトとの戦闘がメインとなる予定です。ラストには意外な「あの人」の登場も……

それでは、感想等をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6990v/>

魔法少女リリカルなのはPHANTASIA

2011年10月9日07時44分発行